
ウルトラマンレオ～異世界を救え！～

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンレオ〜異世界を救え！〜

【Nコード】

N3537L

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

ウルトラマンレオとして最後の敵、ブラックエンドを倒したおおとり ゲンは、トオルに正体を明かし、彼や深山家の人たちに別れを告げて旅に出た。そして大海原で灰色のオーロラに包まれて異世界の二〇一〇年に飛ばされてしまう。そこでのゲンは高校生。しかもその世界にはウルトラマンが存在しない。その上、星人が侵略しに来ていて……。そんな世界でウルトラマンレオの新生活が始まる。果たしてレオはこの世界を守りきれのか？ 人々の為に体を張って戦うレオ。急げ、ゲン！ この世界の地球が危ない！ さあ、み

んなで読もう！

第1話：異世界での初戦

皆はウルトラマンレオを覚えているね？ 彼は昭和四十九年……

一九七四年から翌年まで第二の故郷として愛する地球を守っていた獅子座L77星のウルトラマンを名乗る民間人である。その彼、おとり ゲンは梅田 うめだ トオルと別れてヨットに乗っていた。

「おとりさん！ おとりさん！」

トオルがゲンを見送りに岸へやってきてヨットのゲンに向かって大きく手を振るう。

「トオル——ッ！」

「おとりさん、必ず帰ってきてね——っ！ おとりさん！」
「さようなら——っ！」

泣きながら笑うトオルが見守る中、ゲンのヨットは夕日に消えてゆく……と思いきや、灰色のオーロラが現れ、ゲンを飲み込んだ。

「うわあ！」

ゲンは不思議な空間を漂う。

「ここは一体？」

やがて光が見え、ゲンはそこに吸い込まれた。

「……とりくん、おとりくん！」

その声にゲンは目を覚ます。

桃色長髪で端正な顔立ちの少女が視界に映った。その少女は、ゲンの亡くなった恋人よりも可愛かった。はつきり言って比べ物にならないくらい。

「地の文、百子さんにさらっと酷い事を言わなかった？」

私に質問するな！ 初戦で地獄に叩き落とすぞこら！？

「……………」

「おとりくん、誰と会話してるの？」

「いや、気にしないでくれ。所で、ここはどこ？」

辺りを見た所、そこはどこかの学校の教室だ。

「おおとりくん、大丈夫？」

「え？」

「ここは学校だよ。さっき、おおとりくんはB組の不良と喧嘩した際に頭を殴られて気絶したの。記憶が飛んじやったのかな？」

「学校……」

ゲンは自分の体を改め、制服を着ている事に気付く。

「僕はさっきまで海で小舟に乗ってた筈だけど」

「重症だね。私の名前は分かる？」

ゲンは首を横に振るった。

「自分の名前は？」

「ゲン」

「分からないのは私の名前ね。私は桃園ももどの遥はるか。殴られる以前の事は覚えてる？」

「ブラックエンドって言う怪獣と戦ってた」

「それは昭和五十年三月二十八日金曜日の午後七時に放映されたウルトラマンレオの最終回に出て来た怪獣の名前ね。おおとりくんは眠ってる間にウルトラマンとして戦ってる夢を見てたのかな」

「今までの夢？」

「夢に決まってるでしょ。怪獣なんてこの世に存在する訳ないじゃない。因に、ウルトラマンも存在しないわ。あれはテレビの中だけの話よ」

「じゃあこれは？」

ゲンは左手の薬指にはまっている獅子を象った指輪を遥に見せた。「レオリングじゃない。おおとりくん、そんなのしてたっけ？」

「ひよつとすると、ここは僕の居たのとは違う世界なのかも知れない」

「相当混乱してるわね。家まで送るから、今日はゆっくりと休みなさい」

遥はゲンの鞆を用意すると、彼を練馬の古びたアパートへ連れて行く。

「ここがおおとりくんの家よ。おおとりくんの部屋は二階の一番右。両親は幼い頃に亡くなって一人暮らしよ」

「有り難う、桃園さん」

「どう致しまして。じゃあ私はこれで」

遥はゲンに会釈をすると去って行った。

ゲンはアパートの階段を上り、部屋の前で立ち止まった。

恐々とドアを開けようとするが、扉には鍵がかかっていた。

ゲンはポケットの中を漁り、鍵を取り出した。それを鍵穴に差し込んで回す。

ガチャ——鍵が開かれた。

ゲンは鍵を仕舞い、ドアを開けて中に入って靴を脱ぎ、短い廊下を進んでリビングへ。

小さな机の上に新聞が置いてあった。その上部には二〇一〇年。月×日と書いてある。

（ここは未来なのか？）

学校からここまでの道のりを思い出すと、確かに昭和とは雰囲気違った。

ゲンは鞆を勉強机の上に置いてベッドに横たわる。

ピンポン——と、チャイムが鳴る。

「はい！」

ゲンは玄関へ行つてドアを開けた。その先には食材を持った遥が立っていた。

「桃園さん」

「夕食を作りに来たの。お邪魔するわよ」

遥はゲンの部屋へ上がり込み、食材をキッチンに置く。

「おおとりくん、何食べる？」

「何でもいい」

「じゃあ適当に作るわよ」

遙は料理に取りかかった。

「桃園さん、君はいつもこうしてくれてるの？」

「ひよっとして迷惑？」

「いや、そうじゃないんだけど……」

「けど？」

「ううん、何でも無い」

ゲンは新聞を取ると、ベッドに座って読んだ。

数日前に宇宙から円盤がやってきたという記事が目飛び込んだ。

「桃園さん、この円盤の記事なんだけど」

「ああ、それ？ 酷いよね。いきなりやってきては渋谷に爆弾を落として破壊していったのよ。それ以来、街に夜な夜な怪物が現れるようになってね」

「怪物？」

「うん。けど、まさか宇宙人が本当に居たなんて驚いたわ。今まで宇宙人は空想の産物だと思ってたもの」

ゲンは窓の外を見る。空はすっかり暗くなっていた。

「桃園さん、大丈夫なの？」

「何が？」

「外」

「ああ、今日は泊まってく」

「そう。あ、僕ちよっと出掛けてくる」

「何言ってるのよ！？ 夜は怪物が出るから外へ行っちゃダメよ！」

「大丈夫だって」

ゲンはそう言って玄関に向かう。

「何が遭っても知らないわよ」

「平気平気」

ゲンは靴を履いて外に出た。

「きゃああああ！ 誰か——っ！」

その悲鳴を聞いたゲンは慌てて駆け付けた。女性が蚊を彷彿させる怪物に襲われていた。

「イヤー！」

ゲンは怪物に跳び蹴りを放った。

「怪我はありませんか？」

「大丈夫よ、有り難う」

「ここは僕に任せて、貴方は逃げて下さい。さあ、早く！」

女性は逃げて行った。

怪物は起き上がり、ゲンに言った。

「折角美味しそうな獲物を見付けたというのに邪魔しやがって！」

「お前は何者だ！？」

「俺はキュレックス星から来たモスキートだ。俺の邪魔をした事、後悔させてやる」

モスキートがゲンに襲いかかる。

ゲンはフロントフリップで攻撃をかわした。

「貴様の身体能力、地球人とは思えないな」

「よく分かったな。その通り、俺はお前と同じ宇宙人だ」

「姿を変えられる宇宙人は初めて見た」

「この地球に何の用だ？」

「全ての女性の血を吸って手下にする」

「そんな事は俺が許さん！」

ゲンはモスキートの懐へ駆け込んでパンチを繰り出した。

「ぐわっ！」

地面に転がるモスキート。

二人の戦いの様子を、ゲンを心配して追い掛けてきた遥が物陰から見据える。

「貴様、踏み潰してやる！」

モスキートは懐中電灯に似た装置を取り出し、スイッチを押して光を自らに当てた。そして、五十メートルまで巨大化する。

「ふはははは！ 貴様に巨大化が出来るかな？」

ゲンはいつものように腕をX字にクロスし、大きく回して左手の拳を突き出した。

「レオ——ッ！」

薬指にはめられたレオリングの目の部分に埋め込まれたルビーが輝き、ゲンの体から光が放たれた。

眩い光に一瞬だけ目を瞑った遙。瞼を開いた時には、ゲンの姿はどこにも無かった。

「おおとりくん!？」

ズドンツと大きな鈍い音と共に、腹部に> i 3 9 6 3 — 6 7 1 <と描かれた赤い体の巨人、ウルトラマンレオが巨大化したモスキートの後ろに現れた。

「ウルトラマンレオ!？」

感嘆の声を上げる遙。

「ダア！」

構えるレオ。モスキートは振り返った。

「何だ、貴様は？」

「通りすがりのウルトラマンレオだ！ 覚えとけ！」

どこかで聞いた事があるようなセリフを言っつてモスキートに迫るレオ。

モスキートは難なく攻撃をかわし、レオの背中にキックを浴びせた。

「うわっ！」

レオは腹這いに倒れるが、立ち上がつてモスキートに飛びかかる。モスキートにパンチとキックの連続に飛行投げ。モスキートは廃工場の上に落下して押しつぶした。

レオは横たわるモスキートの顔をマウントで殴りまくり、立ち上がつてモスキートにボディ落としを浴びせ、サッカーボールのように蹴り飛ばした。

地面を転がるモスキート。だが、直ぐに立ち上がり、反撃をしようとレオに駆ける。

レオは高く飛び上がり、右足を赤く発光させて自身の必殺技であるレオキックをモスキートの胸部に激突させて吹っ飛ばした。

勢い良く空中へ放り出されたモスキートは、地面に激突すると同時に爆裂霧散した。

レオは空の彼方へ飛び立とうとしたが、足下にやってきた遥が彼を止めた。

「おおとりくん！」

足下の遥を見下ろすレオ。

「僕の変身を見てたの？」

「この目で確と見届けたわ」

レオは光に包まれ、ゲンの姿になった。

「桃園さん、僕の事は誰にも言わないでくれるかい？」

「言われて困るなら口外しないよ。所で、いつからそんな能力を？」

「あれが僕の本来の姿なんだ」

「それじゃあ、ウルトラマンは実在する宇宙人なんだ」

その時、ゲンのお腹が鳴った。

「星人と戦ったからお腹空いたな」

「夕飯ならもう出来てるよ」

「有り難う」

ゲンは遥と一緒にアパートへ戻った。

「わあ、美味しそうだ。いただきます」

ゲンは遥の手料理を食べる。しかし、見た目とは裏腹にそれは不味かった。

「お口に合うかしら？」

「うん、とても美味しいよ」

ゲンは遥の好意を傷つけまいとして嘘を言った。

「よかった。じゃあまた作るわね」

（正直に言った方がよかったかな）

少し後悔するゲンであった。

第2話：合体光線炸裂！街を襲うラフレシア（前書き）

登場怪獣・宇宙人

—

└─┬─┘ アストラ

—

└─┬─┘ 生物兵器ラフレシアン

政府が秘密裏にラフレシアを品種改良して作った生物兵器のラフレシアンが檻から脱走してゲンと遙が通う高校に侵入！ 巨大化して暴れるラフレシアンの溶解液の危機からアストラが遙を救う。

「ふざけんな！」

街を救った筈のレオとアストラに自衛隊が攻撃を仕掛けた。それにキレたレオは暴走して自衛隊の戦闘機に襲いかかり……。

戦え、レオ！ 急げ、ゲン！ さあ、皆で読もう、ULTRAMAN

N LEO！

第2話：合体光線炸裂！街を襲うラフレシア

無数の星が白銀に輝く宇宙を飛ぶレオの双子の弟であるアストラの前に灰色のオーロラが現れた。

「……！？」

アストラはオーロラの寸前で止まる。

（何だこれは？）

アストラは恐々とオーロラに手を伸ばして触れようとした瞬間、もの凄い吸引力をその身で感じた。

（凄い力だ！）

アストラはその力に耐えようとするが、あまりにも強力な為に吸い込まれてしまった。

「うわああああ！ レオ兄さん——っ！」

叫び声を上げながらオーロラの中へ消えて行くアストラ。

オーロラはアストラを完全に吸い込むと、煙のように消えてしまった。

「うわああああ！」

不思議な空間をもの凄い勢いで流れて行くアストラ。

やがて、光が見えてそこに突っ込むアストラ。

「うわっ！」

空に突然現れた丸い穴から、空き地の地面に短い黒髪に端正な顔立ちをした少年が落っこちてきた。

少年が立ち上がり、穴に向かって飛ぼうとすると、それは塞がるように消えてしまった。

（何なんだここは？）

辺りを見渡す少年。見た所、そこは地球のようだった。

空き地の前の道路を、黒色短髪の凛々しい顔付きをした男子高校

生が横切る。少年はその高校生の顔に見覚えがあった。

少年は高校生を追い掛けた。

「兄さん！」

「え？」

高校生は振り返って少年を見据えた。すると、高校生の瞳が青白く輝いた。

「宇宙人？」

「僕の事を一目で宇宙人と見抜いた貴方は兄さんだね？」

「えっと……誰？」

「弟の名前も忘れるなんて酷いな」

「もしかして、アストラか？」

その高校生は少年の実の兄であるウルトラマンレオ、元いおとりゲンだった。

「うん、やっぱり兄さんだ」

「お前がどうしてここに居るんだ？」

「宇宙を旅してたらオーロラが現れて、それに吸い込まれたらここに着いたんだ。ここは地球なのかい？」

「確かに地球だが、ここは俺たちの居た世界とは別の世界だ。この世界にも星人は居るが、俺たちみたいな超人は居ない」

「それって物凄く拙い世界なんじゃない？」

「ああ、その通りだ。だから俺はこの世界を守る為に星人と戦っていいこうと思う。それに、元の世界に帰る方法も今は分からないしな」
「そう言う事なら僕も協力するよ。二人でこの世界を守っていいこう」
「ああ。おっと、もう行かなきゃ遅れる」

ゲンは学校へと駆けていった。

「あ、兄さん！」

少年はゲンを引き止めようとしたが、しかし、その声は彼の耳には届かず、やがて小さくなって消えてしまった。

キンコンカンコンとチャイムが鳴り響く中、校門を全速力で駆け抜けるゲンは、遅刻寸前で教室に辿り着いた。

「はあ……はあ……はあ……」

脈拍数と呼吸が乱れるゲン。そんな彼の下に遙がやってくる。

「おはよう、おおとりくん」

「ああ、おはよう……」

「遅かったわね。ひよつとして寝坊？」

「いや、寝坊はしてないけど、ちよつと……」

「ああ、成る程」

遙はゲンが登校中に星人と交戦した事を悟った。

「それより、さつき弟に会ったよ」

「弟って、>i3964—671<？」

>i3964—671<はL77星の言葉で、アストラを意味している。

「うん」

「良かったら後で会わせてくれない？」

「それは構わないけど」

「おい、お前らいつまで突っ立ってんだ？ 早く席に着け」

ゲンと遙は教卓の方を向いた。そこには、名簿を手にした眼鏡の男性が立っていた。

二人はそれぞれ自分の席に着く。

「それじゃあ出席取るぞ」

教諭が名簿を開いた。

「会沢！」

「はい！」

「井上！」

「はい！」

と、教諭が次々に生徒の名前を呼び、生徒が返事をしていく。

ゲンは隣の席に座っている遙をこっそりと見据えた。

（桃園さん、可愛いな……）

そんな事を思ったゲンの脳裏に亡き恋人、百子の膨れっ面が過る。
(おっと、他の子に見蕩れていたら天国の百子さんに怒られてしま
う)

「何、おおとりくん？」

ゲンの視線に気付いた遙が不意に振り向いて訊ねた。

「べ、別に？」

ゲンは頬を赤らめてそっぽを向いた。

「ひょっとして私の可愛さに見蕩れてたの？」

「……！？何を言ってるんだ君は？ 僕が百子さん以外の女性に
見蕩れる訳が無いだろ。大人をからかうのはよしなさい」

「百子さんを演じた丘野 かおりって確かウルトラマンレオ四十話
の”恐怖の円盤シリーズ！MAC全滅！円盤は生物だった！”でシ
ルバーブルーメの襲撃で百子さんが死んだから降板した女優ね。D
VDで見んだけど、あの回は心が痛んだわ」

「桃園さんって、何か僕より僕の世界について知ってる？」

「おい、そこ！ ホームルーム中だ！」

出席を取り終えて話をしていた教諭が二人の声に気付いて怒鳴っ
た。

遙は教諭を睨め付けた。

「何だ、その顔は？」

「五月蠅めづるいよ、眼鏡」

「それはこっちのセリフだ——っ！ 桃園、ちよつと来い！」

怒った教諭が遙を廊下へ連れ出す。そして教諭の怒声が響いてき
た。

遙を不憫に思ったゲンは様子を見に廊下へ出た。彼はそこで、頭
の穴から教諭を飲み込もうとしているラフレシアのような形状をし
た怪物、ラフレシアを目撃した。

「先生！」

ゲンはラフレシアに向かって跳ぶと、頭から教諭を引っ張り出
した。

ラフレッシュは痺れ粉を撒き散らして逃げ出した。
「待て！」

ゲンはラフレッシュを追おうとしたが、粉を吸って体が麻痺して動けなくなってしまう。

「くそっ……！」

ゲンは気を失った。

「……とりくん、おおとりくん！」

聞き覚えのある声と揺さぶられる体。

ゲンが目を開けると、遙が心配そうに見詰めていた。

「桃園さん」

ゲンは起き上がって辺りを見渡した。

どうやら保健室のベッドの上のようだ。

「怪物は!？」

「おおとりくんを見て逃げてったわよ」

「君は無事だったのか？」

「私はラフレッシュのような怪物が先生に食らいついた時に直ぐ逃げたから」

「桃園さん、ここは危険だから直ぐに離れた方がいい」

「おおとりくんを置いてけないよ」

「桃園さん……」

その時、廊下から女子生徒の「きゃああああ！」と言う悲鳴が聞こえてきた。

ゲンは慌てた様子でベッドから降りると、扉まで駆け出したが、力が抜けて倒れてしまった。

「無理だよ、おおとりくん。まだ毒が完全に抜け切れてないもの」

「けど、僕が行かなきゃこの学校の生徒が！」

「今は安静にしてなきゃダメ。じゃないと貴方、死ぬ事になるよ」

「この世界を守るためならこの命は惜しくもない」

遥は何とか起き上がったゲンの前に回って頬に平手打ちをした。

ゲンは驚き戸惑う。

「おおとりくんのバカ！ 死んだら誰がこの世界を守るの！？ 私、おおとりくんが死ぬのなんて嫌よ。だって私……」

「桃園さん……」

「分かったら早くベッドに戻って！」

ゲンは遥の言葉に従ってベッドへ戻った。

その頃、学校内では数人の生徒がラフレシアンの餌食となっていた。これについて教職員は直ちに生徒たちを帰宅させ、学校を完全に封鎖した。

体調不良のゲンは次々に聞こえてくる悲鳴に悔しさを感じていた。

遥は本を見ながら薬の調合を行っていた。

「桃園さん、何してるの？」

「解毒剤を作ってるのよ」

「あの怪物の事が分かるの？」

「あの怪物の名前はラフレシアン。政府が生物兵器として極秘に品種改良したラフレシアよ。ラフレシアンの粉を吸ったら最期。普通の人間は生きてないわ」

「そんな危険な生物が何で世に放たれてるんだ？」

「逃げ出したのよ。厳重な檻の中からいとも簡単に」

「頭のいい生物だね」

「そうね。よし、出来……あっ！」

調合中の薬品がちよつとした手違いで爆発を起こし、遥は煤まみれになってしまった。

「最悪ね……」

「桃園さん、もういいよ。僕はもう元気になったし」

ゲンはベッドから降りて宙返り、バック宙返り、と元気よく飛び跳ねる。

「おおとりくん……」

遥は呆れた顔で頭を片手で抱える。

突如、巨大化したラフレシアンが街を襲った。建物を破壊し、逃げまどう人々に溶解液を浴びせて溶かす。

ゲンは遥の駆るバイクでそこへ向かっていた。

「桃園さん、僕のわがままを聞いてくれて有り難う」

「礼なんていいのよ。この世界を守りたいのは私も同じ気持ちだから。全力で貴方のサポートをするわ」

「危ない！」

頭上にラフレシアンの溶解液が迫る。

遥はハンドルを切って避けようとしたが、タイヤが運悪く落ちていたバナナの皮に乗り、スリップしてゲン諸共空中に投げ出された。その先には落下してくる溶解液。

「おおとりくん、何とかして！」

ゲンは両手を頭上に広げた。

「レオ——ッ！」

レオリングのルビー、元い獅子の瞳が輝き、ゲンはウルトラマンレオに変身、光弾で溶解液を吹っ飛ばして遥を手の中に収めて着地した。

「早く安全な所に」

レオは遥を地面に降ろし、ラフレシアンへ接近する。

ラフレシアンはレオに溶解液を飛ばしたが、レオはそれをフリックで避けた。しかし、溶解液の進む先には逃げる遥の姿があった。

「しまった！」

「え？」

振り返る遥。

迫る溶解液。

「……！？」

遥、絶対絶命のその時、腹部に「i3964—671」と言うL77星の文字が描かれた真っ赤な巨人、アストラが現れて彼女を庇

った。

「ぐわっ！」

アストラの背中に溶解液がかかり、ジュワジュワと言う音と共に煙が上がる。

「大丈夫か、アストラ!？」

レオがアストラに駆け寄る。

「レオ兄さん、リライブ光線を……」

「ああ」

レオが額のビームランプからリライブ光線をアストラに放つと、その背中 of 傷が見る見る内に回復する。

アストラは立ち上がり、ラフレッシュアンに向いて拳をバキバキと鳴らす。

「行くよ、兄さん」

「ああ」

アストラがその場にしゃがみ、その後ろにレオが立つ。そして、アストラの頭上で二人が両手を合わせてウルトラダブルフラッシュを放った。

二人の合体必殺光線をともに浴びたラフレッシュアンは大爆発を起こして跡形も無く消滅した。

そこへ自衛隊の戦闘機が飛来する。

戦闘機のパイロットはミサイルの発射ボタンを押してレオとアストラに攻撃を仕掛けた。

「ぐわっ!」「」

怯む双子のウルトラ戦士。それに構わず戦闘機は二人にミサイルを容赦なく撃ち込む。

「くっ……!!」

レオの中でブチッと何かが切れた。

「兄さん!？」

「ふざけんな! 俺たちは生物兵器に襲われた街を救ったんだぞ!」
レオは蠅のように飛び回る戦闘機に攻撃を繰り返す。

「兄さん、やめて！」

アストラがレオを羽交い締めにした。

「放せ！」

アストラの腕から逃れようともがくレオ。

「落ち着いて、兄さん！ 相手は僕たちが守らねばならない地球人だよ！」

「おおとりくん、アストラの言う通りよ！」

アストラに続いて足下の遙がレオに怒声を浴びせる。

戦闘機のパイロットはアストラの必死な行動を見て考えを改め、旋回して去っていった。

アストラはレオをの放した。

「待ちやがれ——っ！」

暴走して我を忘れたレオが戦闘機を追う。

「アストラ、おおとりくんを止めて！」

アストラは足下の遙の叫び声に頷いてレオを追いつけた。

「待つのは貴様だ、糞兄貴！」

兄の暴走にぶつつんした弟が目の中のレオを光弾で撃ち落とした。

「貴様、誰に向かって攻撃してるんだ！？」

「てめえだバカ！ 暫く夢でも見てろ！」

アストラは横たわるレオに光線を放った。

「ぐわあああ！」

アストラの光線を浴びたレオは爆発の衝撃で気を失った。

「う……うっ……うん……？」

見覚えの無い部屋のベッドで目を覚ますゲン。

（どこだ？）

ゲンは体を起こして辺りを見渡す。そこは、遙の香りが漂う部屋だった。

（ここ、桃園さんの部屋？ と言うか、俺は今まで何をしてたんだ

？ ラフレッシュアンをアストラと一緒に倒してから……）

自分たちに攻撃をしてきた自衛隊の戦闘機を襲った事を全く覚えていないゲン。

ドアが開き、遙と人間の姿に変身したアストラが部屋に入ってきた。

「あ、起きてる」

「おおとりくん、君は自分が何をしたか分かってる？」

「え？ 僕、何かした？」

「訊いても無駄だよ、遙ちゃん。堪忍袋の緒が切れてる間の兄さんは記憶が飛ぶんだ」

「え、そうなの？」

「うん」

ゲンは自分が何をしたか全く理解出来なかった。

（俺は何をしたんだ？）

第3話：おとり アスム（前書き）

アストラ人間態の名前が決まりました。おとり アスムです。最初はアストでしたが、それでは周りにバレると思ってアスムにしました。

と言うわけで第3話スタート！ バトルは無いぞ。

第3話：おとり アスム

ゲンと遥が通う杉並区の私立大和学院^{やまと}。敷地の広さは戦闘執事のゲイルさんが通うエスカレーター式の学院には劣ってはいるが、そこそ広大な面積と巨大な校舎が建っている。そんな大和学院の二年B組に、レオの弟、元いおとり アスムは編入した。

B組の教室の前に立ち、挨拶を済ませるアスム。

「じゃあ、おとりくんはあそこに座って」

教諭が指を差したのは、黒髪ロングに端正な顔立ちでつり上がった目つきが特徴である少女の隣の席。そこにアスムは座った。

アスムは隣の少女に声をかけた。

「おとり アスムです。初めまして」

しかし、少女はシカトを放いた。

アスムは超能力で少女の名前を知った。

^{きりしま}桐島 ^{れいこ}麗子。A組の遥とはルックスで順位を競うほどである。因

みに、校内人気ランキングでは、遥と同点である。

「無視しないでね、桐島 麗子さん」

麗子は驚いて振り向いた。

「何で私の名を知ってるんだよ!？」

「君、中学二年までオネショしてたんだ？」

更に麗子の記憶まで読み取るアスム。

「なっ……!？」

凶星。麗子は顔を真っ赤にした。クラス全員が笑い声を上げた。

「ちよつと来なさい!」

麗子はアスムを廊下へ連れ出した。

「あんた、何で私の秘密を知ってんのよ？」

「事前に調べといたんだよ」

「はあ!？ 何でそんな事するのよ!」

「それは、街で偶然見かけた君を好きになっちゃったからさ」

「そう言うの何て言うか知ってる？」

「うん？」

「ストーリーカーって言うのよ。私、あんたの事を訴えるから」

アスムは大声で言う。

「皆さん聞いて下さい！ 桐島 麗子さんはついさっきうつ
！？」

麗子は慌ててアスムの口を塞いだ。

「あんた、私がうんこ漏らしてノーパンだって事どこで知った？」

「教えない」

「何が目的だ？」

「ん……、僕の子を産んでくれない？」

「この私にどこの誰かも分からないお前とデキろと言うのか！？」

「嫌ならいいんだよ。君の秘密全部バラすから」

「くっ……！」

麗子は屈辱だった。

「どうするの？」

「分かったよ！ 産んでやるから誰にも言うな！」

「有り難う、麗子ちゃん」

アスムは教室へ入っていった。

残された麗子は怒り、壁を殴ってヒビを入れた。それと同時にホ
ームルームが終わって教諭が出て来る。

「桐島さん、またやったの？」

「うつせえな、婆ばば！」

「婆！？」

麗子は悔し涙を浮かべながら走り去っていった。

一方、A組ではゲンが遙に数学の宿題をやらされていた。

「おおとりくん、終わった？」

「一応は」

「どれどれ？」

遙はゲンの机からノートを取る。

「凄い、上出来よ」

「桃園さん、何で自分でやってこないの？」

「面倒臭いから」

「宿題は自分の力でやるものだぞ」

「文句言っんなら、もうご飯作ってあげないから」

「それは有り難い。君の料理は壊滅的に不味いから助かる」

「なっ!？」

「あれは食えたもんじゃないな」

「おおとりくんなんか大っ嫌い!」

遥は泣きながら教室を飛び出していった。

「おおとり、女の子を泣かしたらダメじゃないか」

そう言うのは、ゲンの前に座ってる少年だ。

「行って謝ってこい」

ゲンは溜め息を吐いて遥の後を追った。

女子トイレの個室に籠もって泣いている遥と麗子。

二人は互いの鳴き声に気付いて個室から出た。

「遥じゃないか」

「麗子も何か遭ったの？」

「聞いてくれよ。今日やってきた編入生が私しか知らない秘密を知っててさ、恥を搔いちまったぜ」

「私はおおとりくん料理が壊滅的に下手って言われて……」

「おおとり? そいつ、今日入ってきたのとどいう関係だ?」

「どいうって、双子だけど」

「何だと!？」

「私のクラスに居るのがお兄さんだよ」

麗子はトイレを飛び出した。その矢先、ゲンとぶつかって尻餅を着いた。

「痛! てめえ、どこ目付けて歩……いて……?」

（イケメンだ……）

麗子はゲンの顔を見て恋に落ちてしまった。

「いきなり飛び出してごめんなさい！」

麗子は素早く立ち上がり、頭を下げた。

「いや、僕の方こそ余所見をしてて悪かった。怪我してないか？」

「大丈夫です」

「ならよかった。所で、桃園さんを知らないかい？」

「遥？ 遥ならトイレの中に居ますけど」

「ちょうどよかった。呼んでくれる？」

「ちよつと待ってて」

麗子はトイレのドアを開けて中に入った。

「遥、外で格好いい人が待ってるぞ」

「誰？」

「初めて逢う奴だった」

「そう」

遥は廊下へ出た。目の前にはゲンの姿がある。

「おおとりくん！？」

「桃園さん、さっきは酷い事を言ってごめんね」

「もういいよ、気にしてないから。それに、今まで不味いののに我慢して美味しいって言うてくれてたから赦してあげる」

遥が言い終えると同時に麗子が出て来た。

「おおとりだって？」

「うん？」

「アスムのお兄さんですか？」

「そうだけど」

「あの、聞いて下さい。アスムが酷いんです」

「麗子、キャラ変わってるよ？」

「遥は黙ってな」

「麗子さん？ アスムが酷いって？」

「実は——」

麗子はアスムに教室で辱められた事を話した。

「——と言う訳なんです。何とかあいつを懲らしめる方法は無いですか？」

「ん……、そうだな……」

ゲンは考えた。しかし、なかなか良い案は浮かばない。

「こうしたらどうか？ みんなの前でアスムの正体をバラすとか」「桃園さん、それグッドアイデア」

「あの、正体って何ですか？」

「実はあいつ、地球人じゃないんだ。まあ、僕もだけど」「え？」

疑問符を浮かべる麗子。

「この前、街で政府が秘密裏に開発した生物兵器が暴れた事件が遭ったでしょ。その時、戦ってたのが僕とアスムなんだ」

「まさか、貴方は……」

「そのまさかだよ」

「じゃあアスムはアストラ？」

「うん」

麗子はニヤリと笑った。

「有り難う御座います」

麗子は教室に戻ってアスムに声をかける。

「おおとり、私の手下になれ」

「嫌だ」

「そうか。ならお前の正体をみんなにバラすぞ」

「僕の正体だと？」

アスムの顔が険しくなった。

「お前、Ｌ７７星のウルトラマンなんだってな。お兄さんから聞いたぞ」

「ちっ、糞兄貴が余計な事を……」

「おおとり、みんなにバラされなくなったら私に忠誠を誓え」

「くっ……!!」

立場が逆転。屈辱を味わうアスム。

「どうする？」

「仕方が無い。君の要求を吞もう」

「違うな」

「はあ？」

「そうじゃないだろ」

「じゃあ何て言えばいいんだよ？」

「言葉遣いが悪いな」

「……何て言えばいいんですか？ 教えて下さい」

「うん。」 分かりました、麗子様”だ。はい、復唱」

「……分かりました、麗子様」

麗子は笑いを必死に堪えた。

（屈辱だ！）

アスムは麗子の脅迫により彼女の忠実なシモベになった。

（兄さん、僕は赦さないからね）

アスムはゲンへの復讐を誓った。

第4話：周りは皆ソフトクリーム！？ 怒濤のミラーウーマン！ 決してう。ー

かつて、地球を侵略しようとしたインベーターから地球を救った一人の英雄、ミラーマン。そんな彼の娘、ミラーウーマンが地球を救うべく今立ち上がる！

戦え、レオ！ 急げ、ゲン！ 地球が蜷局星人の手に落ちる前に！ さあ、皆で読もう、ULTRAMAN LEO！

第4話：周りは皆ソフトクリーム！？ 怒濤のミラーウーマン！ 決してうー

宇宙空間を地球に向けて飛ぶ宇宙船。その宇宙船が突然爆発を起こした。

爆発の原因は遙か後方を飛行する蜷局とぐろを巻いた飛行物体から放たれたミサイルだった。

蜷局の飛行物体は真っ直ぐに地球へ向かっていた。それを地上のゲンが肉眼で捉えていた。

（星人か？）

やがて、蜷局が地球に侵入した。

ゲンは学校へ登校した。生徒たちは皆、頭に蜷局を巻いたピンク色の帽子を被っていた。

（どうして皆蜷局を被ってるんだ）

生徒たちの異常に疑問符を浮かべたゲンの背後で遙が声をかけた。

「おはよう、おおとりくん」

ゲンは振り返り、挨拶を返そうしたが、頭の蜷局を見て沈黙した。

「どうしたの？」

「あの、頭のそれはひょっとしてうん——」

「ソフトン帽よ」

「ソフトン帽？」

「今ね、勝ち組公園に蜷局型の宇宙船が止まってるの。そこへ行けばもらえるわよ」

「ちよつと見せて」

ゲンは遙の頭からソフトン帽を取った。

「あら？ 私は何してたのかしら」

ゲンはソフトン帽を調べた。内側にコンピュータが埋め込まれている。

「桃園さん、これを誰からもらったんだ？ 教えてくれ」

「え？ ああ、蜷局星から来たソフトンって人だけど」

「これ、預かるね。それと、先生に遅くなるって言つといてくれな
いか」

「うん」

ゲンはソフトン帽を手に蜷局型の宇宙船が着陸した勝ち組公園へ
とやってきた。

町の人々が蜷局ヘアの若い男から帽子をもらっていた。

「おや？」

蜷局ヘアの男がゲンに気付く。

「君、どうして被らないんだい？」

「お前の目的は何だ？」

「それを知ってどうする？」

「事と次第によつては貴様を殺す」

「ふつ、ははは！ 非力な地球人に何が出来る？」

「残念だが俺は地球人じゃない。俺は貴様らのような侵略者を倒す
為に獅子座Ｌ７７星から来たウルトラマンレオだ。死にたくなかつ
たらさつさとこの地球ほしから出て行け」

「おお、怖い怖い。だが、出て行く訳にはいかないな。俺はこの地
球ほしの人間たちを全員奴隷にする。ついでだ。お前も俺のシモベにな
れ」

「断る」

「そうか。ならば、死ね」

ゲンの前に蜷局を被ったアスムが現れた。

「こいつは確かお前の弟のアストラくんだったか？」

「貴様……！！」

「殺やれ」

「はい、ソフトン様」

アスムがゲンに襲いかかる。

ゲンはフリップでかわし、アスムの背後に回り込んでその首に手

刀を叩き込んで気絶させた。

「使えない駒だな」

ソフトンはソフトクリームに手足が生えた怪人に変身した。

手足が生えたコーンに詰まったソフトクリームが食欲をそそり、
ゲンのお腹が鳴る。

「美味しそうだな」

「俺を食ったって美味しくないぞ」

「それは食ってみないと分からないな」

ゲンは構える。倒すのではなく、食してみたいと言う気持ちで。

「おおとりくん！」

遥がゲンを心配して追いかけてきた。

「桃園さん、どうして？」

「おおとりくんの事が心配だったから。それに、側に居ないとおお
とりくんの勇姿が見れないじゃない。それより、美味しそうなソフ
トクリームだね」

「あいつは君を蜷局の帽子で操ってたんだ」

「そうなんだ」

その時、遥のお腹が鳴った。

「おおとりくん、お腹空いた」

「じゃあ、あの大きなソフトクリームを半分こしようか」

二人はニヤリと笑う。

ソフトンは後退りを始めた。

「逃がすか！」

ゲンはフリップでソフトンに蹴りを浴びせた。

「ぐおわっ！」

倒れたソフトンが勢い良く地面を転がる。

「おのれ……！」

ソフトンは立ち上がると、八方から飛来した無数のソフトクリー
ムを体内に吸収して巨大化した。その時のソフトクリームが空中を
飛び交うと言う現象が後に世界中で話題になったのは言うまでもな

い。

「桃園さんは危ないから離れてて」

「うん」

遠くへ走り去る遥。ゲンはクロスした腕を大きく回して左手に作った握り拳を前に突き出した。

「レオ——ッ！」

叫び声と共に獅子の瞳が輝き、ゲンは全身から眩い光を放ってその場から消失し、ソフトンの背後にウルトラマンレオの姿で登場して地面を揺らした。

振り返るソフトン。構えるレオ。ソフトンは先制攻撃を仕掛けた。レオはバックハンドスプリングで攻撃をかわし、バック宙で体勢を整える。

「イヤー！」

レオは構えた。

ソフトンは自身のソフトクリームを飛ばした。

レオはソフトクリームに全身を包み込まれた。

「強そうな体だ。もらった——っ！」

レオを包んだソフトクリームがソフトンに引き寄せられ、吸収されてしまった。

「おおとりくん！」

遠くで見ていた遥がソフトンの足下へかける。

「そのソフトクリームのお化け！ おおとりくんを返しなさい！」

「ああ？」

ソフトンが足下を見る。

「そんなにあの赤い奴が恋しいか。ならば貴様も取り込んでやろう」ソフトンから垂れたソフトクリームが遥に迫る。

遥はバックステップでかわした。

「ちっ、外したか！」

遥は懐から手鏡を取り出して足下に置いた。

「そんなものでどうしようと言うのだ？」

「巨大化するのよ」

「何？」

「スパーク！」

遙は鏡面に飛び込んだ。それと入れ代わりに、灰色の体に女性らしい顔付きの巨人がそこから出て来た。腰には桃色のベルトが巻かれており、腹部にはカラータイマーが付いている。その巨人の名は、ミラーウーマン。彼女は、かつてこの世界でミラーマンとして侵略者と戦い続けてきた鏡^{かがみ} 京太郎^{きょうたろう}の実の娘で、遙が変身した姿である。「ミラーマンだと！？」

「違う！ ミラーウーマンよ！」

「どっちでもいいわ！」

ソフトンがソフトクリームを飛ばす。

ミラーウーマンはフリップでソフトクリームを回避してミラーシユートを放った。

ソフトンは無数のミラーナイフを連続バク転でかわし、レッド手裏剣ビームを放った。

「うわっ！」

地面に腹這いに落下するミラーウーマン。

「それはウルトラマンレオの技！」

「何だか知らないが凄い力を手に入れたぞ」

苦虫を噛み潰したような表情をするミラーウーマン。

「ふはははは！ 貴様も吸収してやる！」

ソフトンの飛ばしたソフトクリームがミラーウーマンを包み込んだ。

（しまった！）

ソフトンがソフトクリームを引き寄せ、ミラーウーマンを体内に取り込んだ。

「きゃああああ！」

暗闇の中を落下するミラーウーマン。ソフトンの胃袋の床に激突して数回バウンドする。

「おおとりくん！ レオ——ッ！」

ミラーウーマンは立ち上がり様に見渡した。

「その声、桃園さんなのか？」

後ろからレオの声。ミラーウーマンは振り返った。

「そうだよ。それより、鏡出して」

「鏡？」

「うん、それがあれば私はここから出られる」

レオは左腕のブレスレットをウルトラマントに変えて鏡を出現させた。

「それじゃ、このソフトクリームを吹っ飛ばしてくるから」

ミラーウーマンはそう言ってレオが出した鏡に飛び込んだ。そして、外の手鏡から出現してソフトンに攻撃を仕掛ける。

「貴様、吸収したはずだぞ！？」

「私は鏡さえあればどこへだって現れるのよ！」

「鏡？」

ソフトンは足下に手鏡を見付ける。

「しまった！」

「もう遅い！」

ミラーウーマンはソフトンを殴り飛ばし、飛び退いてシルバークロスを放つ。

巨大な鍔状の光線が空中を舞うソフトンに当たって爆発を起こし、その衝撃で体内のレオが吹っ飛んだ。

地面に叩き付けられるレオ。それと同時に沢山のソフトクリームが宙を舞った。

人間体に戻る二人。その手にはソフトクリームが握られていた。

「桃園さん、君は何者なんだ？」

「ミラーウーマン、二次元人だよ。一緒にこの世界を守ってこうね」

第4話：周りは皆ソフトクリーム！？ 怒濤のミラーウーマン！ 決してう。ー

ソフトンについて。

ソフトンが配っていたソフトン帽はあの「ソーフトーグローン」のパロディで御座います。そしてソフトンの怪獣形態の能力はあのピンクの魔人さんです。何から何までピンク尽くしのお話でしたw

第5話：遙の楽しい悪夢 ―― って、楽しくないわよ！

古びたアパート。休日の午前にはゲンの部屋に侵入する何者か。何者かはキッチンで冷蔵庫を物色し、食材を取り出して朝食を拵こしらえてリビングの机に置き、ゲンの掛け布団をはぎ取って馬乗りになる。

「おとりさん、いつまで寝てるの？ 今日出勤日でしょ？ 遅れたら隊長さんが怒るわよ」

（百子さん！？）

ゲンは目を開けた。視界に遙の姿が映る。

「何だ、桃園さんか」

「誰だと思ったの？」

「天国から百子さんが起こしに来てくれたのかなって」

「声も頑張って真似てみたんだけど、どうだった？」

「凄く似てたよ。さあ、退いて」

遙がゲンの上から退き、ゲンが起き上がる。

「また君の不味い料理を食べなきゃならないのか」

遙は額に青筋を立てながら苦笑いをする。

ゲンはトイレを済ませ、洗面所で洗顔して食卓で朝食を食べる。

「あれ？」

一口、もう一口。

「美味しい！」

「そんなバカなこと」

遙は自分の手料理を口に運ぶが、美味しい筈がない。

「ひょっとして私の愛がおとりくんの味覚を狂わしたのかな」

「待てよ？」

ゲンは昨日の帰宅途中の事を思い出す。

小腹が空いたゲンは、通学路でサングラスをかけた黒服の男がやつてる屋台を見つけ、焼きそばを購入した。その焼きそばに、妙な

物が混入していて誤って飲み込んでしまった。その事は一応、遥にも話す。

「——と言う訳なんだ」

「それ、デビル星のインベーターだよ」

「いんべえだあつて？」

「平仮名やめて。インベーターは日本語に直すと侵略者ないし侵入者」

「デビル星人か。分からなかったな」

「おおとりくん、君が焼きそばを食べた屋台に行こう」

「居るかな？」

ゲンは取り敢えず朝食を平らげると、昨日の屋台があつた場所へ向かった。

「あれ？」

遥が屋台を指差す。暖簾には”らあめん”と書いてある。

「ラーメン屋だよ、あれ。僕が食べたのは焼きそば……あ！」

ゲンは屋台に黒服を着ている黒のサングラスをかけた男を見た。

「あいつだ！ 間違いない！」

二人は慎重に近付く。

「……！？」

遥の姿に驚いた男は脱兎の如く逃げ出す。

「待て！」

二人は男を追った。角を曲がり、廃墟へと辿り着く。

「観念しなさい！」

「貴様、昨日の焼きそばに何を入れた！？」

逃げ場を失った男は、上空に現れた宇宙船からの光を浴びて紫色の液体のみで出来た巨大なドラゴン、毒竜ヒドラに変身した。その体から垂れた液体が白煙と共に地面を溶かす。

「毒だと！？」

「おおとりくん、逃げよう！」

「いや、しかし！」

「インベーターを倒したいと言うとおおとりくんの気持ちは分かるわけど、相手は毒の液体よ。倒す術が無いわ」

「くっ……！」

二人は退却した。それを良い事に毒竜^{ヒドラ}は街を溶かし始めた。事態を重く見た国軍は戦闘機を出撃させるが、全てを毒液で溶かされて全滅。人々は恐怖に怯え逃げ惑うだけだった。

「くそっ！」

逃げ惑う人混みの中、ゲンは振り返った。

「やはり放つとけない！」

引き返すゲン。

「おおとりくん！」

遙は追いついて引き止めた。

「ダメ！ 何の対策も無いでしょ！？」

ゲンは遙の制止を振り切って変身する。

「レオ——ッ！」

怒りに燃えるレオの渾身の一撃が毒竜に放たれた。しかし、その体に手応えは無く、毒液で腕に激痛が走る。

「ぐわっ！」

レオが引いたその腕から白煙が立ち込める。見れば皮が爛^{ただ}れていった。

炎症した部位を押さえるレオ。

毒竜はレオに毒液を飛ばした。

「レオ！」

地上の遙が焦りの表情をする。

レオは片手バク転で毒液を回避してウルトラマントを手にする。

毒竜は再度、毒液を飛ばす。

レオはマントを盾に変えて防いだ。

（そうか！ これがあれば！）

レオは盾を剣に変えて毒竜を斬り付ける。すると毒竜が分裂をした。

（何！？）

レオは忽ち^{たちま}囲まれ、身動きが取れなくなってしまう。
「レオ……」

地上の遥が哀れむような眼差しでレオを見据える。

レオは遥を見詰めた。その表情から、助けて欲しいと言う想いが伝わってくる。

遥は路肩に止まっている車を見付けると、そこへ駆け寄ってサイドミラーの前に立った。

「ミラー・スパーク！」

鏡面に飛び込み、ミラーウーマンに変身して出て来る。

ミラーウーマンは両手からミラーナイフを放った。

二体の毒竜をミラーナイフが通過する。

シルバークロスを一体に発射。毒竜の液体が飛び散る。

「ぐわっ！」

レオは飛び散った液体を全身に浴びた。

「あ、ごめん！」

散乱した毒液が一つに集まり、毒竜を形作る。

「光線もダメなの！？」

レオは飛び上がり、ウルトラマントをミラーウーマンに投げた。

ミラーウーマンは受け取ったウルトラマントを羽織って飛び上がった。

青空に浮かぶ二人の超人。毒竜はそれを見上げた。

「これからどうするの？」

「光線を中心まで貫通させて大穴を開ける。手伝ってくれ」

「そんな事して大丈夫なの？」

「分からない。地球が壊れなければいいんだが……」

「粉々になったらどうしてくれるのよ？」

「その時は僕と他の星で暮らそう」

「いや、私は空気が無いとダメだから他の星を探してる間に死んじやうよ？」

「兎に角、光線を放つんだ！ 後の事はそれから考える！」
「分かったわ」

レオはシューティングビームを、ミラーウーマンはシルバークロスを合体させて地面に放った。

二つの強力な光線が地中まで掘り進み、マグマが噴き上がる。

「よし、何とかしてあいつらをマグマに突き落とすぞ！」

「でもどうやって？」

レオはミラーウーマンを見据える。

「私に囿になれと？」

屈託無い笑顔で頷くレオ。

「何で私なのよ！？ 男である貴方が行きなさい！」

「さっさと逝け！」

レオはミラーウーマンを叩き落とした。

「おおとりくん、字が違うよ——っ！」

ミラーウーマンは泣きながら地面に墜落した。

迫り来る二体の毒竜。ミラーウーマンは立ち上がって穴へと向かう。

「鬼さんこちら、手の鳴る方へ♪」

ミラーウーマンは毒竜たちを挑発した。

怒りを覚えた毒竜たちがミラーウーマンに突進する。

ミラーウーマンは毒竜たちが眼前まで迫った所でバックスツテッブ穴を飛び越えた。

二体の毒竜は慌てて立ち止まろうとするが、間に合わずに穴へ落下してマグマに沈んだ。

「成功だわ！」

その時、大地が激しく揺れ始めた。

「きゃあ！」

バランスを崩して穴へと落ちるミラーウーマン。

「遥——っ！」

レオが慌てて穴へ飛び込み、ミラーウーマンの手を掴んで止まっ

た。

「有り難う、名前で呼んでくれて」

「感謝する所そこ!？」

「他に感謝する事つてあるの？ 元はと言えば、貴方が私を囿にするからこうなっただから助けて当然じゃない。それより、地響きは大丈夫？」

「いや、ダメかも」

「ええ!？」

「爆発まであと五秒かな」

「えっ、そんな!？ ちょっと待ってよ!」

「四……、三……、二……」

「嫌——っ！ 爆発しないで——っ!」

「一……」

ドーン!——地球は遂に大爆発を起こして粉々になった。

「うわああああ!」

チャイムと同時に教室で居眠りをしていた遙が悲鳴を上げて目を覚ました。

「あれ?」

「桃園さん、どうしたんだい?」

振り向く遙。

「おおとりくん? 地球は大丈夫なの?」

「はあ? 何を寝ぼけて……」

第6話：奪われた心臓、蜘蛛女を倒せ！

杉並の一角に桃園家はあった。

「お母さん、ただいま」

家にかかる遙。返事はない。

「お母さん？」

やけに静かだ。遙は家の中を調べた。

「お母さん！」

部屋を一つ一つ開けていき、中を確認する。

「ここで最後……」

お風呂場の扉。その向こうから光が漏れている。

遙は生唾をゴクリと飲んで扉を開けた。

「……！？」

湯船に一杯に張られた水。その中に服を着たままの女性が沈んでいた。

「お母さん！」

遙は女性を湯船から引つ張り出し、携帯電話で119番。

「あの、母が溺れてるんです！ 住所は……の桃園です！」

遙は携帯電話を仕舞い、女性の気道を確保して人工呼吸を行った。

（お願い、吹き返して！）

人工呼吸を続けて数分、救急車のサイレンが聞こえた。

遙は急いで外に出ると、路肩に止まった救急車に駆け寄った。

「こっちです！」

救急隊を家に連れ込む遙。

「AED準備！」

隊員がAEDの電源を入れ、女性から服をはぎ取ってパッドを胸に張り付け、心拍数のチェックをする。

「心配停止！ 電気ショックやります！」

隊員はAEDのボタンを押した。コンピュータが警告をする。そ

して、女性に電気ショックが行われた。

「心臓動きません!」

「もう一回だ!」

隊員は同じ事を何度も繰り返すが、女性の心臓は止まったままだ。ピンポンとチャイムが鳴った。

遙は玄関に駆けてドアを開けた。その向こうにはゲンの姿。

「おとりくん」

「何か遭ったの?」

「お母さんがお風呂で溺れてたの。今、救急車呼んで……」
「上がるよ」

ゲンは家に上がり、電気ショックを受けている女性の下へやってきた。

「……!」

ゲンは宇宙人としての超能力で、女性の体内に存在している筈の心臓が抜き取られている事を知った。

「お母さん、死んじゃうのかな……?」

「救急隊の方、その女性にいくら電気刺激を与えても無駄です」

「素人に何が分かる!?」

「だってその人、心臓が無いんです」

「えっ……?」

隊員の手が止まる。

「おとりくん、どうしてそんな事が?」

隊員はパッドを外して女性の体を調べるが、傷一つ付いていなかった。

「心臓を抜き取ったような後なんてどこにも無いけどね」

「……?」

浴室の壁を見たゲンの瞳が青白く輝き、そこに隠れているサングラスに黒服の女の姿を見つける。

「気を付ける! インベーターだ!」

「何だって!?!」

隊員が慌てふためく。

「どこに居るんだ!？」

「その壁に張り付いてます!」

ゲンが壁を指差すと、女が姿を現した。

「うわあ!」

隊員二名が慌てて離れる。

「その人の心臓を返せ!」

女インベーターはゲンたちの間を縫う様に駆け抜け、外へ飛び出した。

「待て!」

追いかけるゲン。遙もその後が続いた。

「くそ、どこ行った?」

二人の必死な追跡も空しく、インベーターを発見する事は出来なかった。

御手洗家の地下に、みたらサイエンス Guard Member

ス、通称SGMという組織の基地がある。ゲンと遙はそこに足を運んだ。

SGMの御手洗博士の話によると、ここ数日、女性の心臓が肉体に傷一つ付ける事なく体内から抜き取られると言う怪事件が多発していた。

「君たち、一刻も早くインベーターを退治してくれ」

行く宛ても無く街を彷徨っている二人の頭に、御手洗博士のその言葉が過る。よき

「ねえ、おおとりくん。インベーターはどうやって心臓を抜き取ったのかな?」

「恐らく物質転送装置の類たぐいだと思うよ。物質をデジタルデータに変換したのを別の場所へネットワークで転送した後、元の姿に戻すんだ」

「そんな事が出来るの？」

「地球の科学力じゃ無理。星人は頭がいいから科学力も地球より進んでるんだと思うよ」

ゲンが言った刹那、遙が突然倒れた。

「桃園さん！？」

「苦しい……！」

ゲンは遙の胸を透視した。

「……！？」

心臓が無い。

辺りを見渡すゲン。すると、走り去る女インベーダーの姿を発見した。だが、彼は追う事を躊躇った。

「おお……とり……くん……、私は……いい……から……、早く……追っ……て……」

意識を失う遙。

「桃園さん！ 桃園さん！」

ゲンは遙を抱き起こした。

「君だけは死なせない！」

ゲンは赤い光球となって遙の胸に入り込んだ。
支えるものが無くなり倒れる遙の体。

「う……う……」

遙は目を開けて起き上がった。

「生きてる？ ……？」

左手の薬指に違和感を感じた遙は、左手を目の前に持ってきた。

薬指にレオリングがはまっている。

「おおとりくん、私の中に！？」

『桃園さん、インベーダーを追うんだ！』

頭の中に響くゲンの声に従って女インベーダーを追う遙。

やってきたのは、勝ち組公園の一角。そこにインベーダーの宇宙船が止まっていた。その前に置いてあるガラスで囲われた棚には、沢山の心臓が並べられていた。そしてそれを見据えながら笑みを浮

かべている女インベーター。

遙は女インベーターの前に飛び出した。

「……!?!」

振り返る女インベーター。

「お前の心臓は抜いた筈だぞ!?!」

「私の心臓は一つじゃないの。取り敢えず、私の心臓を返してもらいましょうか」

女インベーターは蜘蛛を彷彿させる怪物、ブラックウイドーに変身した。

「この心臓はこれから生まれてくる私の子どもたちの物だ! 渡す訳にはいかない!」

遙に飛びかかり攻撃を仕掛けるブラックウイドー。遙はそれをとんぼ返りでかわし、ブラックウイドーの後ろに着地して向き直った。ブラックウイドーは振り返り、白い糸を飛ばして遙の体に巻き付けた。

身動きを封じられた遙。獅子の瞳が輝き、レオに変身した。

「ふん!」

レオは糸を引き千切り、ブラックウイドーへ突進し、ラッシュ攻撃を浴びせる。

「ぐあっ!」

蹠^{よろ}跟めくブラックウイドー。レオは透かさず蹴脚で吹っ飛ばした。「ぐうっ!」

地面に叩き付けられるブラックウイドー。

「おのれ……!」

ブラックウイドーは立ち上がって巨大化した。

「踏み潰してやる!」

ブラックウイドーがレオを踏み潰しにかかった。だが、既の所で巨大化されて失敗に終わる。

「何者だ、貴様!?!」

「俺は深紅の若き獅子、ウルトラマンレオだ!」

「その名前、覚えておこう」

ブラックウィドーはそう言って糸を飛ばす。

レオはフリップでかわし、ブラックウィドーの背後に回り込んでラッシュ攻撃を浴びせる。

「ぐっ！」

怯むブラックウィドー。

「はあ！」

レオは蹴脚でブラックウィドーを吹っ飛ばした。

「っ、強い……！」

「ダア！」

レオは高く飛び上がると、フリップしてレオキックの体勢に入っ
た。

「イヤー！」

赤く発光した右足を立ち上がって糸を飛ばそうとするブラックウ
ィドーに激突させた。

「うわああああ！」

ブラックウィドーはレオキックの衝撃で吹っ飛ばされ、空中で大
爆発を起こした。

レオはシューティングビームで宇宙船を破壊し、地上にある心臓
の入ったガラスケースを掴み取り、飛び立って空に消え去った。

ゲンは真っ白な空間に佇たたずんでいた。

（ここは、どこなんだ？）

辺りを見渡すが、ひたすら真っ白なだけで何も無い。

「……！？」

背後に人の気配を感じたゲンが振り返ると、灰色の体にカラータ
イマーの付いたベルトを腰に巻いた巨人、ミラーマンが立っていた。
彼はゲンを見下ろし、そして言った。

「遥の事を頼む。異世界の戦士よ」

「貴方は？」

「私はミラーマン。三次元の地球を守る為に異次元の世界からやってきた二次元人だ」

「じゃあ、桃園さん……いや、遥さんは貴方の？」

「そうだ。私は、とある事情で二次元の世界に行かなくてはならなくなり、三次元の世界で出来た娘を妻の雪絵の所に残した。だが、インベーダーの野望の為に雪絵は若い命を失い、遥は独りぼっちになってしまった。そこで、君に頼みたい。遥の父親となって彼女を守ってやって欲しい」

「分かりました。遥さんは僕に任せて下さい！」

ミラーマンの体は薄くなり、やがて完全に消え去った。そして、ゲンの周りを暗闇が覆い始めた。

（今度は何だ？）

「起きろ、いつまで寝ておるのだ」

（誰だ？）

「起きろと言ってんのが分からんのか！？」

ゲンの耳をつんざくような大声。

「うわあ！」

ゲンは驚いて飛び起きた。

「やっと起きたか」

その声の主は、Ｌ７７星がマグマ星人の艦隊に襲われた際に、傷付いた己の体で光子砲に狙われたレオの盾となり、星を任せて消え去ったアルス王だった。

「父上？ 父上なのですか！？」

「久しぶりだな、レオ」

「父上、貴方はお亡くなりになられた筈では！？」

「ああ、流石の私もあの時は死んだと思った。だが、こうしてちゃんと生きている。このミラーマンの世界でな」

「父上！」

ゲンはアルスに抱き付いた。

「何だ、どうした？」

ゲンは涙を流した。

「良かった、生きてて良かった！」

「それぐらいで泣くな、男だろ」

アルスはゲンを優しく抱き締めた。

「悲しい想いをさせてすまなかったな」

第6話：奪われた心臓、蜘蛛女を倒せ！（後書き）

ウルトラマンSTORY 0からウルトラマンアルスの登場です。頭部はライオンのたてがみを彷彿させ、顔はレオに近い赤い体の巨人。腹部にはLと7を合わせたような>i6868—671<のシークレットサイン。光線技は持っていないが、徒手空拳と腰に携えた剣で敵に立ち向かう。レオとアストラの父親。病床の妻が居た。

次回予告

ダブルデート中のゲンの前に突如と現れた灰色のオーロラ。そのオーロラに飲み込まれたゲンたちは異世界の2004年に飛ばされてしまう。その世界では地球に魔の手を伸ばす星人と超人的力を使った執事たちが地球の平和を守る為に戦っていた。だが、巨大化した星人に執事たちは為す術も無くなった。

執事たちに協力するゲン。戦え、レオ！ 異世界の地球を守れ！

第7話：ハヤテのごとく！

雲一つ無い晴天の朝、ゲンと遥は駅前に居た。先ほどから時間を頻りに気にしている。誰かを待っているのだろう。

「遅いな。アストラも麗子さんも何してるんだ」

刻一刻と時間だけが過ぎていく。

……。

……。

……。

一時間ほど経っただろうか、ようやく二人が姿を現した。

「遅いぞ、アストラ」

「ごめんね、兄さん。麗子ちゃんがなかなか起きてくれなくて」

「あんたがちゃんと起こさないからいけないんでしょ？」

「僕は何度も起こしたさ！」

「まあまあ、時間が無くなるから早く行こうか」

「はい、ゲンお兄様」

「麗子ちゃん、キャラ変わってるから」

「五月蠅いわね。何か文句あるの？」

「兄さんには遥ちゃんが居るんだからやめてよ」

「いいじゃない、別に」

「よくないよ！」

「ははーん、あんた妬いてるの？」

「妬いてないよ！」

アスムと麗子の痴話喧嘩を見て微笑むゲン。

「おおとりくん、早くしないと電車行っちゃうよ」

「ああ、今行く。お前ら、行くぞ？」

ゲンたち三人は遥から切符を受け取って改札を抜けてホームへ向かった。

出発の合図がホームから聞こえてくる。

「ドアが閉まっちゃう！」

四人は階段を駆け下り、ホームに辿り着くと同時に列車のドアが閉まり、発車してしまった。

「あーあ、行っちゃった」

「仕方が無い、次を待とう」

その時、列車進入のアナウンスが流れ、行き先が”ハヤテのごとく！”となった見た事も無いデザインの電車が姿を現した。

「おおとりくん、何か面白そうな電車が来たよ。遊園地はやめてこれにしようか」

「”ハヤテのごとく！”って確か、畑^{はた}健二郎^{けんじろう}の描いてる執事漫画のタイトルだよね？」

「うん、そうだよ。もしかしたら、これに乗れば行けるかも知れないよ」

「そんなバカな話があるか」

「おおとりくんはオーロラを通ってこっちに来たんだよね？ だったら考えられなくもないんじゃないかな」

「桃園さんはこれが異世界へ渡る為の列車だと言うのかい？」

「兎に角、面白そうだから乗ってみようよ」

遙は列車に乗り込んだ。ゲンたち三人もそれに続く。

ドアが閉まり、発車する列車。

「おおとりくん、この電車運転席が無いよ！」

「え？」

ゲンは列車の先頭に立つ遙の下へ駆け付けた。

「本当だ。どうやって動いてるんだ？」

ゲンが列車の進む先を見据えていると、灰色のオーロラが現れた。
「……！？」

オーロラが列車を飲み込むと、そこは二次元の世界だった。周りの物に合わせて自分たちも三次元から紙に描いた絵になってしまう。
「なっ……」

やがて列車は止まり、ドアが開いた。ゲンたち四人は降りる。

「退いて欲しいんじゃないかな——っ!？」

その声と共に自転車に乗った少女がゲンにぶつかり、彼は吹っ飛んだ。

「うわああああ!」

空中に弧を描き、地面に激突するゲン。

「いてて……」

ゲンは少女を見て瞳を青白く輝かせた。

少女の上にハムスターの虚像が重なる。

「ハムスター?」

「ハムスターなんかじゃないよう! て言うか、格好良い貴方は誰?」

「僕は獅子座のＬ７７星から来たおおとりって言っただけど、ここは何の世界?」

「Ｌ７７……おおとり……ちょっと来て!」

少女はゲンを引きずって駆け出した。

「おおとりくん!」

「兄さん!」

遥たちは後を追った。

練馬の住宅街に三十年ほど放ったらかしにされていた古びた集合住宅、ムラサキノヤカタがある。ゲンたちは少女にそこへ連れてこられた。

「ここにこの漫画の主人公が住んです。会って言って下さい」

「——と言われても……」

ゲンは悩んだ末、入ってみる事にした。

住宅の一角に”三千院”という部屋がある。他は全て空き家。ゲンは目の前の扉をコンコンとノックした。

「すいません、誰か居ませんか?」

すると、ドアが開いて金髪ツインテールの小さな女の子が出て来

た。見るからにひ弱そうだ。

「……………」

ゲンの瞳が青白く輝く。

「ドラゴン？」

「ほう、お前には私がそう見えるのか」

「ここへ連れてきてくれた子はハムスターだった」

「そいつは西沢^{にしざわ} 歩^{あゆむ}だな。私は三千院^{さんぜんいん} ナギだ。お前は？」

「ゲン…… おおとり ゲン」

「何、おおとり ゲンだと！？」

ナギと名乗る少女は部屋に戻り、大きな物音を立てると、”ウルトラマンSTORY 0”の六巻を手に戻ってきた。そしてページを捲り、そこに登場するレオとゲンの顔を見比べた。

「同じだ！ お前、ウルトラマンレオか！？ そしてそっちの美男子がアストラだな！？」

ゲンとアスムは感嘆の表情を浮かべた。

「ナギちゃんだっけ？ 君は何者なんだ？」

「この集合住宅の管理人だ。まあ、兎に角入れ。直にハヤテが帰ってくる。それまで待つてろ」

ナギは四人を部屋に上げた。

第8話：ダブル獅子

遙はワンセグを起動させてニュースの中継を見ていた。

「おおとりくん、街で怪獣が暴れてるみたいだよ」

「何だって!？」

ナギに借りた”ウルトラマン STORY 0”を読んでいたゲンは顔を上げた。

「ほら」

遙がゲンにテレビを見せる。

画面には獅子のような格好をした怪獣が街を破壊する様子が映っていた。その姿はデジモンのレオモンに近かった。政府はこれをレオと名付けたそう。ウルトラマンレオであるゲンとしては、今すぐにも叩き潰しに行きたい気分だ。

「ご覧下さい！ 巨大なライオンが建物を次々に破壊しています！各地から集まった執事たちが戦っていますが、戦況はかなり不利です！」

画面が切り替わり、スーツを身に纏った男女たちが映し出された。

「何て無謀な！」

「言ってる場合？ 早く行ってきたよ」

「ああ」

ゲンは外へ出ると、拳を突き出した。

「レオ——ッ！」

獅子の瞳が輝き、ウルトラマンレオに変身したゲンが飛び立った。

「イヤー——」

叫び声と共に体当たりで獅子型怪獣レオを吹っ飛ばすウルトラマンレオ。

傷ついた体で立つ地上の執事たちは吃驚した様子でそれを見据えた。

「おい、ウルトラマンレオじゃないか!？」

「異世界から俺たちを助けに来たんだ！」

深紅の若き獅子は地上に居る一人の少年と目が合う。水色短髪で女の子のような顔の少年だ。

「ガオーッ！」

怪獣がライオンの鳴き声を発しながらレオに接近する。

レオも振り向いてライオンの鳴き声を上げる。

怪獣は驚いて動きを止めた。

（どうしたんだ。なぜ襲ってこない？）

レオは恐々と怪獣に近付く。

怪獣は尊敬の眼差しをレオに向けた。

レオはブレスレットをウルトラマントに変えると、それを怪獣に被せた。

怪獣は見る見る小さくなり、地球のライオンと同じ姿になった。

レオは光に包まれ、ゲンの姿に戻ってライオンに近付く。

ライオンはゲンに擦り付いた。

「何だよ、お前？」

ライオンは背中を低くした。

「俺に乗れって言うのか？」

ゲンはライオンの背中に跨る。

「ガオーッ！」

ライオンは鳴き声を上げると、ゲンを乗せて駆け出した。

「どこへ行くってんだ？」

ライオンは住宅街に入り、ムラサキノヤカタの前で止まった。

「ここは……」

ゲンはナギの部屋に戻った。

「おおとりくん、どうなったの？」

「何か懷かれちゃったみたいで、外に居るよ」

「その後ろに居るライオンがそうなの？」

「え？」

ゲンは後ろを振り返った。

「うわあ！」

驚いて飛び退くゲン。

「何で居るんだよ」

ライオンはゲンに飛びつき、押し倒して顔を舐め始めた。

「そのライオン、おおとりくんに飼われたいんじゃない？」

「うわ、ちよっとくすぐったいって。やめろ」

ゲンはライオンの顔を押さえつけた。

「頼むからアストラでも食って大人しくしててくれ」

「え、ちよっと兄さん！？」

ライオンがアスムに襲いかかる。

「うわあああ！」

アスムの悲鳴が住宅中に木霊した。

練馬の住宅街を水色短髪の少年、綾崎^{あやさき} ハヤテが歩いていた。

（まさかウルトラマンが実在したなんて）

ハヤテはムラサキノヤカタまでやってくると中へ入ってナギの部屋の前で立ち止まる。

室内が騒がしいが、気にせずに開けて入る。

「ただいま戻りました！」

「お帰りなのだ、ハヤテ！」

ナギが出迎えた。

「あの、誰か来てるんですか？」

「ウルトラマンご一行かな」

「え？」

第9話：ライダー怪人

リビングへとやってくるハヤテ。そこには見慣れない四人が居た。ゲン、遙、アスム、麗子だ。

「彼らがウルトラマン？」

四人がハヤテに向く。

ゲンが先に口を開いた。

「おおとり ゲン、ウルトラマンレオだ
続いて遙が名乗る。」

「私は桃園 遙。ミラーウーマンだよ」

「僕はアストラ。アスムって呼んでね」

「私は桐島 麗子。ただの人間よ」

「綾崎 ハヤテです。さつきはあり……」

ライオンと目が合うハヤテ。

「うわああああ！ な、何でライオンが！？」

「こいつ、俺に懐いちまったみたいなんだ」

「そ、そうですか……。しかし、空想上の人物がなぜこの世界に居るんですか？」

ゲンはミラーマンの世界からこの”ハヤテのごとく！”の世界へ来た経緯を説明した。

「世界を渡る列車ですか……。何だか電王の時を走るデンライナーみたいですね」

「何でこの時代の人が未来の変身ヒーローの事を知ってるの？」
そう突っ込むのは遙だ。

この世界の年は二〇〇四。この時代で”仮面ライダー電王”を知る人物は居ない筈なのだが……。

「何言ってるんですか？ 今は二〇一〇年の五月ですよ。電王は三年前に放映された作品。知ってて当然じゃないですか」

「それならお前は社会人だろ！？」

ゲンの鋭い突っ込み。どう見てもハヤテは高校生だとは思えない。

「う……、それを言われると何も……」

「それより、この世界で何が起きてるのか、教えてくれないか」

「ええ、実は——」

四人が来る数日前の事だった。

この世界の地球に、宇宙から知的生命体が破壊を目的に襲来した。異星人は高度な科学技術で変身ヒーローに出て来る怪人や怪獣を呼び出し、街を襲ったのだ。

「成る程。俺たちがこの世界へ連れて来られた理由が何となく分かった。どうやら、俺たちはこの世界の星人を倒さなくてはならないようだ」

「何か面白くなってきたね。あの列車に乗って正解だったかも」

「そうと決まれば、早速行こうよ」

「待て。そう慌てなくても星人は逃げない。まずは様子を見るんだ」

「じゃあさ、様子見も兼ねてこの世界の街を探検しようよ」

「うん、ならペアを組もう。二人組になって街をパトロールするんだ」

「私、おとりくんと行きたい」

「いや、君は今回、アストラとペアを組んでもらう」

「ええ？」

「アストラ、それでいいな？」

「うん、僕は構わないよ」

「麗子さんは？」

「私もそれで構いません。と言うか、寧ろそれを望んでました」

「麗子ちゃん、呉々も兄さんにはちよっかい出さないでね」

「あんたの考えてるような事は起きないから心配しなくても大丈夫よ。たぶん……」

「よし、じゃあ行くか」

「はい！」

ゲンと麗子は部屋を出てムラサキノヤカタを離れた。

「待って下さい！」

後ろからハヤテが追いかけてきた。

振り返る二人。

「僕も同行します。それに、あなた方はこの街について詳しくないでしょうし、案内しますよ」

「それは有り難い」

ゲン、麗子、ハヤテの三人はパトロールを始めた。

その時、背後から迫る黄色い光球がゲンの体に入り、蹠踉すると同時に白い砂が全身から溢れ出た。

「ゲンさん！？」

「大丈夫ですか、ゲン様？」

麗子がゲンを支えようとすると、彼に突き放されてしまった。

ゲンは通りすがりの通行人につかみかかった。

「出て来いよ！ そこに居るのは分かってんだ！」

通行人はゲンを振り払う。

「鼻が利くようだな」

通行人の体から白い砂が溢れ出ると同時に獅子を彷彿させる怪人、ライオイマジンが姿を現した。

「へっ、最初っからクライマックスで行くぜ！」

ゲンは赤、青、黄、紫の四色のボタンが付いたベルトとライダーパスを取り出す。そしてベルトを装着し、赤いボタンを押してパスをセタツチする。

「変身！」

h Sword form }

その瞬間、ゲンは光に包まれて姿を変えた。仮面ライダー電王・ソードフォームに。

「俺、参上！ おらよ！」

剣型に組み立てた武器、デングッシャーでライオイマジンを切りつける電王。

「ぐわっ！」

「おらおらおらおら……！」

連続スラッシュ。

ライオイマジンは虫の息だ。

「とどめだ」

電王はライダーパスをバツクルに翳す。

Full charge

「行くぜ、必殺……俺の必殺技、パート五十九！」

デンガッシャーから離れた剣先がライオイマジンを襲う。

ライオイマジンは爆発を起こし消滅した。

電王はベルトを外して変身を解き歩き出す。

「ゲンさん、イマジンに憑依されてしまったみたいです」

「ゲン様！」

麗子はゲンを追いかけて捕まえる。

「触るんじゃねえ！」

ゲンは麗子を振り払った。

「ゲン様、どうなさったんですか!？」

ゲンが蹠^{よろ}跟めき、その体から赤い鬼、モモタロスが追い出された。

「何なんだ、お前は？」

「てめえ、何で俺を抑えられんだよ!？」

「そいつはモモタロスと言うイマジンです。憑依した人の願いを叶え、時間を変えようとする怪人ですが、そのモモタロスは特別なので害はありません」

「取り敢えず倒しておくか」

ゲンは拳を突き出した。

獅子の瞳が輝き、レオに変身するゲン。

「何だ、あの巨人は!？」

驚き戸惑うモモタロス。

「はあ！」

レオの巨大な拳がモモタロスを押しつぶした。

モモタロス、仮面ライダー電王の世界へ強制送還。

レオ、光に包まれてゲンに戻る。

「綾崎、他にもこんなのが居るのか？」

「ええ、例えばあれとか」

ハヤテが指を差した先に、人を殺害してその人に擬態する緑色の怪物の姿が。

「あれは？」

「ワーム。仮面ライダーカブトに出て来る宇宙からの侵略者です」

「倒しといった方が良さそうだな」

ゲンは人間に擬態したワームに接近する。

「何だ、貴様は？」

「お前と同じ地球外生命体さ」

「仲間か？」

「違うな。俺は……ウルトラマンレオだ」

「……？ 何だか知らんが、我々の侵略活動を邪魔する奴は殺す」

ワームは擬態を解いてゲンに襲いかかる。

ゲンは攻撃をかわし、カウンターを浴びせた。

地面を転がるワーム。

「……？」

立ち上がったワームに異変が起きた。

「脱皮します！」

「脱皮？」

「はい。脱皮するとクロックアップと言う、途轍もない速さで攻撃して来るんです」

赤くなったワームの体から蚊を彷彿させるキュレックスワームが現れた。

キュレックスワームは目にも留まらぬ速度でゲンを襲う。

「うわあ！」

ゲンは宙に舞った。

（速すぎて見えない！）

キュレックスワームは追撃をかけ、ゲンを地面に叩きつけた。

「ぐわっ！」

ゲンの前にキュレックスワームが姿を現す。

（だが、追いつけない訳じゃない）

ゲンは立ち上がると、透かさず拳を突き出した。

「レオ！」

獅子の瞳が輝き、ゲンは巨大化せずに変身した。

「かかってこい。粉々にしてやる」

レオとキュレックスワームはクロックアップの世界に入った。

麗子とハヤテの前をレオとキュレックスワームが物凄い速度で駆け巡る。その度に激しい衝撃音が聞こえてくる。

「凄い……」

レオが飛び上がり、光を放ちながらキュレックスワームめがけて急降下する。

「イヤー！」

レオキックがキュレックスワームに炸裂し、大爆発を起こしてそのワームが消滅した。

燃え盛る炎の中からゲンが出て来る。

その様子を宇宙空間の飛行物体から監視モニターで見ている謎の異星人は言った。

「何だ、あの赤い奴は……」

この星人は一体何者なのだろうか。その正体は謎に包まれるばかりである。

第10話：ゲン対ヒナギク（前書き）

突如現れたウルフ星人の息子。彼はジョギング中のヒナギクの体に乗っ取り街を破壊し始めた。そこへ駆けつけたゲンたち三人。ヒナギクに乗っ取った星人は亡き父の仇としてゲンに牙を剥く。

星人を倒そうとするゲンをハヤテが止める。しかし、気絶させられてしまい……。

戦え、レオ！ 急げ、ゲン！ 星人から少女を取り戻せ！ さあ、みんなで読もう、ウルトラマンレオ！

第10話：ゲン対ヒナギク

負け犬公園に灰色のオーロラが現れ、ウルフ星人が出て来た。

「血が欲しい……」

ウルフ星人はジョギングコースを走っている金の髪留めをした桃色長髪の美少女を見付ける。

「あいつだ……」

ウルフ星人は少女目掛けて駆け出した。

「……！？」

少女がウルフ星人に気付く。

「お前の血を寄越せ！」

ウルフ星人は少女に襲いかかった。

少女はサイドステップでかわす。

「何でウルフ星人がこの世界に居るのよ！？」

「ジャッコフロストに美味しい血が飲めると教えてもらってな」

「ジャッコフロスト？」

「この星を破壊しようと思んでいる異星人さ。血を飲ませてくれる代わりに俺がこの星で一暴れする事になった」

「ならばこの私、桂^{かつら} ヒナギクが相手よ！ 正宗！」

ヒナギクの手元に木刀が飛来する。

「はあ……！」

星人へと駆け出し、正宗を振るうヒナギク。

星人はバク転で攻撃をかわし、隙を突いてヒナギクに噛み付いた。

「ぐっ……！」

激痛に顔を歪ませるヒナギク。

「お前の血は格別だ。今まで味わった事が無い」

「離れなさいよ！」

ヒナギクは星人を蹴脚で吹っ飛ばした。

「お前はこの星で一番強いのか？」

「だったらどうするのよ!？」

ヒナギクは正宗を振るい、真空の刃を飛ばした。

「うおっ!？」

マトリックスの弾丸避けのごとく体を反らす星人。その上をカマイタチが通り抜ける。

「気に入ったぞ。お前を俺の嫁にしてやる」

「お断りよ!」

「お前は俺の嫁になると決まってるんだア!」

ヒナギクは一瞬で星人の懷へ移動して正宗を振りかぶった。

「……!？」

「これで終わりよ!」

正宗を一気に振り下ろす。が、既の所で星人が真剣白刃取りで受け止めた。

「何!？」

「クフフ……、お前の体は強そうだ。俺が使ってる」

「……?」

星人は正宗を放すと、透かさずヒナギクの体に憑依した。

「……!？」

ヒナギクは蹠跟めくが、直ぐに立ち直ってにやりと笑みを浮かべた。

「さて、どこから破壊しようかしら」

「う……、腹減ったな……」

街をパトロールしていたゲンが呟いた。

「じゃあ、ファミレスにでも入りますか? この辺で一番美味しいと評判のお店があるんですよ。案内します」

ゲンと麗子はハヤテに連れられてファミレスに……いや、その跡地にやってきた。

「あれ?」

「ちょっと、何も無いじゃないのよ」

ゲンはマックシーバーを確認した。メーターが怪獣反応を示している。

「怪獣が近くに居るぞ！」

「何ですって！？」

「あっちだ！」

ゲンを先頭に三人は反応のある方向へ進む。

「あそこだ！」

ゲンが指差したコンビニが爆発を起こして消滅した。

「行くぞ！」

ゲンたちは爆発したコンビニの下へ駆け付けた。

燃え盛る炎の中に長髪の人影が見えた。マックシーバーの反応が大きくなっている。

「怪獣だ！」

三人は身構える。

正面の炎から人影が出て来た。その正体はヒナギクだった。

「ヒナギクさん！？」

「ハヤテくんじゃない。こんな所で何してるの？」

「それはこっちのセリフですよ！　今、炎の中から出て来ましたよね！？」

ゲンを見たヒナギクの顔が険しくなる。

「こんな所でお父さんの仇に遇えるなんてね」

「仇？」

「私のお父さんは貴方に殺された」

「ヒナギクさん、何を言ってるんですか！？」

「覚悟しなさい、ウルトラマンレオ！」

ヒナギクはそう言うと、正宗を手にゲンへ襲いかかった。

ゲンはひらりと身をかわしてカウンターを打ち込む。

「がっ！」

ヒナギクは蹠踉めいた。

ゲンは透かさず追撃をかけた。

「ぐわっ！」

蹴脚で吹っ飛ばされたヒナギクが空中に弧を描き地面に叩き付けられる。

「ゲンさん、ヒナギクさんを傷付けないで下さい！」

「しかし、奴からは怪獣反応が！」

「ヒナギクさんは僕の大切な親友なんです！ どうしても殺^やると言うなら、僕が相手になりますよ？」

ゲンは振り返る。

「綾崎……」

ゲンはハヤテの鳩尾に拳を叩き込んだ。

「うつ！？」

気を失って倒れるハヤテ。

「すまん。面倒だから少しだけ寝ててくれ」

ゲンはヒナギクへ向き直る。

「麗子さん、綾崎を連れて出来るだけ遠くへ行ってくれ」

「はい！」

麗子はハヤテを背負って走り去った。

「貴様は何者だ！？」

ヒナギクは徐に立ち上がる。

「知らなくていいわよ。貴方は私の正体を知る前に死ぬんだから」

「随分と自信過剰だな。相手してやる、かかってこい」

「そうさせてもらっわ」

ヒナギクはゲンに突進。拳を顔面に放った。

「ぐわっ！」

ゲンは吹っ飛び、地面を転がった。

（こいつ、出来る！）

ゲンは立ち上がり、相手の様子を窺^{うかが}う。

「変身しないでいいの？」

「お前など、変身しなくても倒せる！」

「私も甘く見られたものね。じゃあ、一瞬で殺してあげる」

ヒナギクはそう言うと、オオカミ怪人に変身した。

ゲンの脳裏に、冴子に乗り移ったウルフ星人の姿が過る。

「お前は!？」

「そうだ。俺は貴様に殺されたウルフ星人の息子だ。よくも……よくも俺の親父を！」

星人はゲンの懐へ一瞬で移動して鋭利な爪で引つ掻いた。

「ぐわっ！」

ゲンの体から血飛沫が上がる。

(生身では無理だ！)

ゲンは獅子の瞳を輝かせ、レオに変身した。

「おらア！」

星人は蹴脚でレオを上空へ吹っ飛ばし、自らも飛び上がった。しかし、ヒナギクの高所恐怖症が発動した。

「怖い！ 高いの嫌だ！」

星人は空中で静止するレオにしがみついた。

「頼む、ゆっくり降りてくれ」

レオは星人を振り払って叩き落とした。

「うわああああ！」

地面に激突するウルフ星人。

レオは星人の前に着地した。

「貴様、ゆっくりだと言っただろ!？」

「俺が貴様らのような星人の言う事を聞くと思うか？」

星人は立ち上がり、巨大化してレオを踏み潰しにかかる。

レオは横へ転がってかわすと、巨大化して星人にバックキックを浴びせた。

怯む星人。そこへ透かさずレオの顔面パンチ。

「ぐわっ！」

星人は地面に倒れた。

レオは星人の両足を掴みウルトラスイングで投げ飛ばした。

星人は空中に弧を描いて地面に墜落した。

「お前に一つ訊きたい。どうやってこの世界に来た？」

「ジャッコフロストに連れてきてもらったのだ。美味しい血を鰭腹飲ませてくれるとな」

「ジャッコフロスト？」

「奴はあそこに居る」

星人が天を指差すと、レオがその先を向いた。

「ダア！」

レオは飛び上がった。

「俺を置いて倒しに行くつてか」

レオは上空千メートルの高さまで来ると、フリップしてキックの体勢に入った。

「何！？」

レオの赤く発光した右足が星人の頭に激突した。

「ぐわっ！」

星人は吹っ飛び、地面に転がった。

「あれ？ここはどこ？」

星人は自分より小さな建物を見て疑問符を浮かべた。

「て言うか、何で私こんな格好なの？」

星人は自分の姿にどう反応したら良いか分からない。

（星人の意識が消えた？）

レオは星人に恐る恐る近寄った。

星人はレオに気付いて振り向いた。

「誰？」

「記憶喪失……なのか？」

「じゃなくて、誰が入ってるの？」

「はあ？」

「ここって円谷のスタジオに作ったミニチュアのセットでしょ？」

「いや、屋外だけど」

「そんな事言ったって騙されないわよ」

星人は立ち上がると、レオの後ろに回り込んでその背中を改めた。
「あれ、チャックは!？」

「チャックなんてある訳無いだろ!」

レオは振り返り様に突っ込んだ。

「嘘でしょ!？」

「ヒナギクだったな。君が目覚めます前、どこに居たか覚えてるか?」

「負け犬公園」

「そこで起こった事を思い出してみろ」

「そう言えば、ウルフ星人が現れて、私の体内に入り込んだきたわ」

「君はウルフ星人と一体化してしまったんだ」

「えっ……、それじゃあ私は巨大化してるって事!? それで貴方と戦ってたの!？」

「ああ、そうだ」

「どうしたらウルフ星人を追いつけるの?」

「一度一体化したら分離する事は出来ない。君はオオカミのままだ」

「そんな……! 元には戻れないの!？」

「戻れない。だが、人間の姿になる事は出来る」

「どうやって?」

「自分の姿をイメージするんだ」

「えっと……こうお?」

ウルフ星人の体が縮み、ヒナギクの姿になった。

レオは光に包まれてゲンに戻る。

「しかしこんな事は初めてだ。星人の意識を乗っ取るなんて。君は一体何者なんだ?」

「私はウルトラウーマンデ이지ーよ」

「ウルトラウーマンデ이지ー?」

「私の故郷はあそこよ」

ヒナギクは空を指差した。その方角には獅子座がある。

「あの獅子座にはもう一つの星があったわ。この地球に似て美しい

惑星ブロッサム。ところが一ヶ月前、凶悪なミート星人の襲来の為に星は消滅。そのせいでお父さんもお母さんも、そして姉まで失ったわ」

「君も、俺と同じなのか……」

「所で、一つ訊きたいんだけど、貴方の星ってL77星よね？」

「そうだけど」

「でも変よ。この世界にL77星は無かったわ」

「それはそうだ。俺はこの世界の住人じゃないからな。ここへは世界を渡る列車で来た」

「何それ？」

「と言われても何て答えればいいか……。それより、この世界では異世界から怪物がやってきてるんだって？」

「ええ、あいつのせいだね」

ヒナギクを天を指差した。

「ジャッコフロストか。一体何者なんだ」

その正体は未だに謎のジャッコフロスト。彼が現れるのいつになるのか……。

第11話：女マグマ星人の素顔は亡き恋人！？ マグマ星人現総統ミラ・スカ

白皇学院の森へ墜落したマグマ星人の宇宙船。マグマ星人の女、ミラ・スカレットの仮面の下は、ゲンが嘗て別の地球で恋した百子の顔だった。

愛する女性の顔に頭が混乱するレオ。それを利用してウルトラウーマンデイジーに変身したヒナギクをレオに倒させるミラ。

騙されたレオ。ミラを守るゲン。さあ、みんなで読もう、ウルトラマンレオ！

第11話：女マグマ星人の素顔は亡き恋人！？ マグマ星人現総統ミラ・スカ

宇宙空間に灰色のオーロラが現れ、そこから巨大な宇宙船が出て来る。

（ここにレオ^{あいつ}が居るのね）

乗っているのは、嘗てL77星を襲撃したマグマ星の総統、視力を奪ったデスギラスに乗るあの目元を仮面で被った長髪の黒い星人の娘である。彼女は遙々レオの世界からレオと一騎打ちをしにきたのだ。

（あいつのせいで私のパパは……）

宇宙船は地球へと侵入し、杉並に建つ白皇学院の森へと墜落した。その衝撃でマグマ星人の女は船外へ放出された。

「ぐわっ！」

地面に叩きつけられる女。

「痛……！」

徐に起き上がり、宇宙船の方を向く。

「また着陸に失敗したわ。このポンコツめ！」

女は宇宙船を蹴りつけた。

「あいつはどこに居るのかな」

女は手懷けたデスギラスを宇宙船から出し、それに乗って空へ飛び立った。

「そうだ。捜すより出向いてもらおうか。デスギラス、地上に降りて」

デスギラスは降下して着陸した。

マグマ星人の女はデスギラスから降りる。

「デスギラス、貴方は上で待機よ」

デスギラスは飛び上がった。

「さて、来てもらおうじゃない。ウルトラマンレオ！」

マグマ星人の女はサーベルを取り出し、周囲の建物を破壊し始め

た。

「出て来なさい、ウルトラマンレオ！」

その言葉に応えて、レオが空の果てからマッハでやってきた。女の前に着地するレオ。

「マグマ星人は全滅させた筈だぞ」

「全滅なんかしてないわよ。我々マグマ星人は今、ババルウ星に住んでるわ。ここで会ったが百年目。父に代わってお前を殺してやる！」

「来い！ 返り討ちにしてやる！」

女は一瞬でレオの懷へ移動し、その腹をサーベルで貫いた。

「ぐあっ！」

夥しい量の光がレオの傷口から溢れ出した。

レオは倒れ、激痛にのたうちまわる。

「今楽にしてあげるわ」

マグマ星人はサーベルでレオの首を突こうとしたが、しかし、レオが間一髪の所で避け、立ち上がってアルスの剣を取り出した。

「その体で立ち上がるとは。無理しない方がいいんじゃない？」

「俺は死んでもマグマ星人だけは殺す！」

「憎悪に満ちてるわね」

「うおおお！」

レオはマグマ星人に突進して剣を振るう。

星人はサーベルで剣を受け止めた。

「ぐっ……！」

膝を着くレオ。カラータイマーが赤く点滅を始めた。

（拙い！ このまま戦い続けたら本当に死ぬ！）

「ふん！」

星人はレオを蹴り飛ばした。

「ぐわっ！」

地面に転がるレオ。

「とどめよー！」

飛び上がった星人がサーベルをレオの首に向けて急降下した。

「死ね——っ！」

レオは既の所で横へ回避した。

「ちっ！」

地面に突き刺さったサーベルを抜く星人。

レオは立ち上がり、隙を突いて星人の仮面を剣で割った。

「……！？」

レオは星人の素顔を見て、シルバーブルームに地球を襲撃された際に失った恋人の百子を思い出した。

「百子さん！？」

「……？」

疑問符を浮かべる星人。

「百子さんがどうしてそんな格好を！？」

レオは酷く錯乱していた。

（こいつは面白い。事前に調べといてよかったわ）

「久しぶりね、おおとりさん」

「……！？」

「私の事は覚えてるかしら？ やまぐち 山口 ももこ 百子よ」

「バカな！ 百子さんは死んだ筈！」

「ええ、死んだわ。でも、仲間のマグマ星人が生き返らせてくれたのよ」

「嘘だ……似てるだけだ！」

「本当よ、おおとりさん」

「そんな……」

レオは四つん這いになった。

（百子さんがマグマ星人？ 百子さんが俺の星を破壊した奴らの仲間？ 俺はどうすればいいんだ？）

「おおとりさん、私の言う事聞いてくれる？」
顔を上げるレオ。

「この地球を破壊してちょうだい」

「なっ……！？」

「でも、今は傷を癒すのが先決ね。じゃあまたお会いしましょう？」

星人は着陸したデスグラスに乗って飛び立った。

レオは光に包まれ、ゲンの姿になった。

そこへヒナギクがやってくる。

「凄い怪我！ 今治してあげるわ！」

ヒナギクはゲンの傷口に両手を翳した。

見る見る塞がるゲンの傷。

「……？ 君は治癒能力を持つてるのか」

「ええ。それより、何か遭ったの？」

「生きてたんだ……」

「誰が？」

「百子さんだよ。俺の大好きな」

「へえ、それは良かったじゃない」

「でも、百子さんは俺の星を破壊したマグマ星人の仲間だったんだ。俺はどうしたらいい？ 彼女を殺すべきなのか？」

「……………」

ゲンの脳裏に星人の「この地球を破壊してちょうだい」と言う言葉が過る。

「ねえ、ゲンくん。それって、百子さんに似ているだけで別人じゃないの？」

「でも彼女は俺の地球での名前を知っていた！ あれはきっと百子さんだ！」

「じゃあ貴方の好きにすれば？ けど、もしそれでこの星を破壊しようとするなら、私は貴方を倒す」

「う……………」

「よく考える事ね。それじゃあ」

ヒナギクは去って行った。

百子と同じ顔を持つマグマ星人の女が練馬の街に降り立った。

「怪獣だ！」

地上の人々が慌てふためく。

星人は周囲の建物を破壊し始めた。

「こんな星、消してやるわ！」

その時、光波熱線が星人の横を掠めた。

「……………！？」

星人が振り返ると、胸部にカラータイマーを付けたマゼンタの体に女性らしい顔付きの巨人が立っていた。その名はウルトラウーマンデイジー。彼女は嘗て獅子座に存在した惑星ブロッサム女王である。腹部には惑星ブロッサムの文字で>i6929—671<と描かれている。

「誰？」

「ウルトラウーマンデイジー……貴方を倒す者よ」

「笑わせてくれる！」

星人はデイジーに襲いかかった。

デイジーは巨大化させた正宗で星人のサーベルを弾いた。

「くっ！」

蹠跟めく星人。そこへ透かさず攻撃を浴びせるデイジー。

「ぐあっ！」

星人の体から火花が散る。

「とつとと片付けてやるわ！」

デイジーは星人を連続で斬り付ける。その度に星人は後退する。

その様子を逃げ惑う人々の中から見据えているゲン。

「やめろ！ やめてくれ——っ！」

ゲンは駆け出した。

「レオ——ッ！」

左拳を前に突き出し、獅子の瞳を輝かせて変身するゲン。

「彼女に手を出すな！」

レオはデイジーに跳び蹴りを放った。

「きゃあ！」

吹っ飛んだデイジーが空中に弧を描いて地面に墜落する。

「百子さんは下がって！」

（フッフ、私を亡き恋人と思い込んでるな。よし）

「おおとりさん、あの女をやっつけて！」

レオはマウントポジションでデイジーの顔面を数回殴り、その上から退くと両足を掴んでウルトラシングを浴びせる。

「イヤー！」

空中に放り出されるデイジー。

「やめて、レオ！ 貴方はそいつに騙されてるのよ！」

「彼女がそんな事する筈が無い！」

レオはレッド手裏剣ビームを放ってデイジーを撃ち落とした。

「ぐわっ！」

地面に叩き付けられるデイジー。

（完全に混乱してるわね）

レオはタイマーショットを放った。

「……！？」

素早くかわすデイジー。地面が掘り起こされた。

「そっちがその気なら、本当に倒すわよ！」

「お前では俺には勝てない！」

レオは空高く飛び上がる。

「イヤー！」

上空千メートルでフリップしてレオキックをデイジーに激突させた。

「ぐわっ！」

勢い良く吹っ飛ばされ、地面に墜落するデイジー。

「ぐっ………！」

立ち上がろうとするも、体に力が入らない。

（何て強さなの。これが、愛って奴………？）

デイジーは煙のように姿を消した。

「よくやったわ、レオ」

振り返るレオ。星人がサーベルで右の太ももを突ついてきた。

「ぐっ！」

サーベルを引っこ抜くと、そこから光が漏れ出す。

「何を！？」

「バカね。私は貴方を利用したのよ」

「何だつて！？」

「言つとくけど、私は百子じゃないから。マグマ星人現總統のミラ・スカーレットよ。元總統である父の仇、有り難く取らせてもらっわ。消えちゃいなさい」

「貴様——っ！」

レオはアルスの剣を取り出してミラに斬り掛かる。

ミラはバックステップで刃を避けた。

「まあ、今日の所は見逃しといてあげるわ。さっきの女を片付けてくれたからね。じゃあ、また逢いましょう？」

ミラはそう言って飛び立ち、空に消え去った。

レオは光に包まれ、煙のように消えて行った。

第11話：女マグマ星人の素顔は亡き恋人！？ マグマ星人現総統ミラ・スカ

女マグマ星人現総統、ミラ・スカレット。彼女は戦闘を好むベジ
タブルな王の子的な役回りにしようと思います。戦いの中で次第に
絆を築いていくレオとミラ。やがて二人は仲間として行動を共にす
るようになって……。

第12話：円盤の逃亡

「何て事をしてくれたんですか!？」

都立病院の個室。ハヤテはゲンを殴り飛ばした。

「うぐっ！」

床に横たわるゲン。ベッドには意識不明のヒナギクが寝ている。

「貴方が星人に騙されてなければヒナギクさんは！」

「すまない……」

「謝って欲しくありませんですよ！」

涙を堪えるハヤテは部屋を飛び出した。

（俺は……何て事をしてしまったんだ……）

ゲンは立ち上がると、窓の前まで行つて空を見た。

宇宙空間に飛行物体が見える。

「う……う……」

ゲンは振り返った。

ヒナギクが目を開けて起き上がった。

「気が付いたみたいだな」

ヒナギクはベッドを降りてゲンに近付くと、窓から彼を突き飛ばした。

「うわあ！」

地面へと落下するゲン。ヒナギクは飛び降りた。

「何をするんだ!？」

「貴方がこいつの意識を飛ばしてくれたお陰でまた活動が出来るわ。お礼に殺してあげる」

ヒナギクはそう言つてウルフ星人に変身して巨大化した。

ゲンの上に迫る星人の巨大な足。

「死ね——っ！」

星人がゲンを踏み潰しかけた刹那、ゲンは素早く避けた。

「ぐっ……!!」

右足の激痛に顔を歪めるゲン。

（この体で変身したら俺は消滅するかも知れない。だが……）
ゲンが腕をクロスした刹那、空が黒雲で覆われ、雷と共にミラ・スカーレットが現れた。

「ウルフ星人、お前の相手は私がしてやる」

「ミラ・スカーレット!？」

「レオ、お前を倒すのは私だ。他の奴にやられては困る」

ミラは右手をサーベルに変えてウルフ星人に襲いかかった。

星人はバク転で後退する。

「どういうつもりだ、マグマ星人!？」

「さっき言っただよな？ レオを倒すのは私だと」

「貴様ア!」

星人が跳び蹴り、エルボードロップ、連続パンチ、アッパーカット、飛び膝蹴りのコンボ攻撃をミラに仕掛ける。

「ぐわっ!」

ミラは地面に倒れた。

「貴様如きが俺に適うと思うなよ。俺の体はウルトラマンの物なんだからな。と言う訳でこのまま去れ。さすれば命までは取らん」

「そ……そう言うセリフは……優位に立ってる者が吐く物よ!」

ミラは手元の土を星人の目に投げ付け、星人がそれを腕でガードした隙にその腹に蹴りを入れる。

「食らいやがれ!」

が、てんで効いていなかった。

「それで終いか？」

「うっ……」

星人はミラに足払いをかける。

「うわっ!」

尻餅を着くミラ。

「来なさい! ブルーギラス! パープルギラス!」

青のギラスと紫のギラスが現れ、星人に襲いかかる。

「そのギラスたちは凄いわよ。私が一度命令を下したが最後、破壊するものが無くなるまで暴れ回るの」

ミラはゲンを見る。

「レオ、これで傷を治しなさい」

ミラはゲンの前にメディカルガンを置いた。

「これは……？」

「わざわざ光の国へ入り込んで持ってきて上げたのよ。有り難く使いなさい」

ゲンがメディカルガンの光を右足の傷に当てると、見る見る内に塞がって行く。

「ミラ・スカーレット、どうして？」

「私がお前を倒す前に死なれちゃ困るのよ。塞がったらさっさと変身して戦いなさい」

「ミラ、お前は本当は良い奴なんだな」

「……………」

ミラは頬を赤らめた。

ゲンは立ち上がると、クロスした両腕を大きく回して左拳を前に突き出した。

「レオ——ッ！」

獅子の瞳が輝き、ウルトラマンレオに変身したゲンはギラスどもに加勢する。

「三対一なんて卑怯だぞ！」

「ヒナギクを返せ！」

レオの怒濤の攻撃が星人を追いつめる。

「くそっ……！」

「ダア！」

レオは飛び上がり、標高千メートルでフリップしてウルフ星人にレオキックを浴びせた。

「ぐわあ！」

吹っ飛んだ星人が地面に転がり、動かなくなる。

レオはレオマスクパワーで星人をヒナギクに戻して生き返らせ、その中から星人を取り除いた。

「う……う……」

徐に目を開けるヒナギク。それをレオとギラスどもが見据えていた。

「君から星人は取り除いた」

レオはそう言って飛び立とうとした。しかし、上空から巨大な円盤が現れた。

「何だ？」

「ジャツコフロストの円盤よ」

「あいつが倒さねばならぬ敵か」

「私もジャツコフロストは個人的に気に入らないから、特別に手を貸してあげる」

レオとミラ、二体のギラスは円盤に向かって飛び上がった。

「ええい、よくもオオカミを！」

円盤から機関銃が放たれる。

レオたちは迫り来る無数の銃撃を次々にかわして円盤へ近付いて行く。

「仕方が無い！ 次の世界で待つてるぞ！」

円盤はレオたちが寸前まで近付くと、一瞬で姿を消した。

「どこへ行った？」

「恐らく次の世界に行ったのかもね」

「次の世界……」

「じゃあ私はこれで。次に逢う時は必ず倒すから覚悟しなさい」

ミラはそう言うと、ギラスを連れて消え去った。

レオは地上に降り、ゲンの姿に戻る。それと同時に、この世界に来た時に乗ったのと同じ列車が目の前に現れた。

「おおとりくん、次の世界に出発するみたいだよ」

車内の窓から顔を覗かせる遥。

ゲンは列車に乗り込み、次の世界へ向かった。

列車の行き先は
” オニデレ ”
” となっていた。

第12話：円盤の逃亡（後書き）

次回からはオニデレの世界です。レオご一行はその瞳で何を見る？

第13話：オニデレの世界

ゲンたちを乗せた異世界を渡る列車、ウルトラライナーはトンネルの中を走っていた。

「ちよつと待て。桃園さん、ウルトラライナーって何だ？」

「何で私に訊くの？ 作者に訊けば？」

「いや、作中の登場人物は作者と会話出来ないんだ」

説明しよう。ウルトラライナーとは、ウルトラマンを運ぶからそう名付けられたのである。

「成る程」

「誰と話してるの？」

「ちよつと地の文とな。で、アストラと麗子さんは何やってるんだ？」

先頭車両の前部に居るゲンは後部を見る。

アスムと麗子が裸で抱き合っていた。

「あいつら、もうあそこまで！？」

「麗子が私の義妹いもつとになるのも近いね」

「桃園さん、それどういう事？」

「私とおおとりくんが結婚するって事だよ。約束した筈だけど？」

「ちよつと待って。僕にそんな覚えは無いぞ」

「ああ……約束したのはレオが来る前のおおとりくんだった」

「君の言う”おおとり”と君は恋人同士なの？」

「そうだよ」

「……何で俺はこの体に入ってしまったんだ」

「あ、見て見て！ 出口だよ！」

遙がウルトラライナーの進む先にある光を指差した。

「桃園さん、”オニデレ”ってどんな漫画なの？」

「えっとね……軟弱手芸ボーイの今元いまもと 正ただしと最強ヤンキーガールの育島・アンジェリカ・紗夜さやの超絶ミスマッチカップルが巻き起こす

ラブコメディだよ。物語の舞台は埼玉県。この埼玉では、鬼頭衆と言う不良少女たちを県内最強の紗夜が率いてるの。通り名は鬼頭のサヤ。歯向かう者は誰であろうと鬼の如き力で瞬殺だよ」

「ふうん……」

遥の説明が終わった所でウルトラライナーはトンネルを出た。そこは、さいたま市の閑静な住宅街。路肩を歩く数人の男の子たちがこれを見て呆気にとられている。

住宅街を抜け、街へと出るウルトラライナー。

道行く人々がウルトラライナーを見て驚いている。

やがて、ウルトラライナーは中学校の前に止まった。

「アストラ、麗子さん、降りるぞ！」

アスムと麗子は服を着てゲンたちと一緒にウルトラライナーから降りた。

目の前にはこの世界の主人公が通う虹ノ瀬中学校がある。

「おおとりくん、これからどうするの？」

「取り敢えず、拠点となる場所を探そう」

その時、地響きが四人を襲う。

「何だ！？」

「まさかね」

「アストラは麗子さんを頼む！俺と桃園さんは原因の調査だ！」

ゲンはマックシーバーを見ると、遥と共に反応のある方へ向かった。

激しく揺れる住宅街。頭に二本の角が生えた金色長髪の端正な顔

立ちをした少女、育島・アンジェリカ・紗夜と眼鏡をかけた軟弱そ

うな少年、今元 正は驚き戸惑う。

「凄い揺れだよ！」

「ああ、こんなの初めてだぜ！」

下方から恐竜の鳴き声が聞こえ、一億五千万年前のジョンストン

島に生息していた恐竜、ゴモラザウルスが地中から出現した。

「正、恐竜って大昔に絶滅した筈じゃなかったか？」

「そうだけど。と言うか、早く逃げようよ！」

正と紗夜は一目散に逃げ出す。

ゴモラは二人を見付けると鼻先の角から光弾を放った。

巨大な光弾が逃げる二人に迫る。

「うわああああ！」

光弾が地面に激突して爆発を起こし、二人は空中に弧を描いて地面に墜落した。

「ギャアオ！」

ゴモラが駆け出し、二人を踏み潰そうとする。

「正の子を産む前に死ぬのは嫌だ——っ！」

「紗夜さん、こんな時に何言ってるの!？」

頭上に迫るゴモラの巨大な足の平。二人が死を覚悟したその時、

ゲンと遥が現れて間一髪の所で二人を救出した。

「間に合って良かった！ 桃園さん、早く二人を！」

「分かった！」

「あの、貴方は？」

「自己紹介は後だ」

ゲンはゴモラの方に向く。

「そんな、恐竜に挑もうなんて無茶だよ！」

「大丈夫。おおとりくんなら」

ゲンは腕をX字にクロスした。しかし、ゴモラが変身させまいと光弾を放ってくる。

「うわああああ！」

ゲンは光弾を浴びて悲鳴を上げながら吹っ飛んで空の彼方へ消え去った。

「おおとりくん！」

遥は懷から手鏡を取り出して足下に置いた。

「よくもおおとりくんを……！ ミラー・スパーク！」

遙は鏡面に飛び込むと、ミラーウーマンに変身してゴモラの前に現れた。

「何だよ、あの巨人!？」

「もしかして円谷のミラーマンじゃない!？」

「あれはミラーウーマンだ」

二人の元にボロボロになったゲンが戻ってきた。

振り返る二人。

「ミラーウーマン？」

「ミラーマンの……鏡 京太郎の娘なんだ……。ぐっ！」

ゲンは膝を着いた。

「大丈夫ですか!？」

「ああ、大丈夫だ。それより、安全な場所へ逃げるんだ。巻き込まれなくなったらな」

「貴方はどうするんですか？」

「俺は彼女の戦いを見届ける」

ゲンの目線の先に居るミラーウーマンがミラーナイフを撃つが、

ゴモラには効いていなかった。

ゴモラはミラーウーマンに突進して鼻先の角を突き刺した。

「ぐっ！」

「拙い！」
ます

ゴモラがミラーウーマンに零距离超振動波を浴びせる。
ゼロショット

「きゃああああ！」

ミラーウーマンは爆発を起こして消滅し、同時にゲンの足下に遙が落つちてきた。

「役に立たなくて……、ごめんね……」

そう言って気を失う遙。

「君たち、この人を頼む！」

ゲンはX字にクロスした腕を外側へ大きく回し、左拳を前に突き出した。

「レオ——ッ！」

ゲンが全身から光を放って二人の前から消失した。

「消えた！？」

そして、巨大化したウルトラマンレオが空中でフリップし、ゴモラに跳び蹴りを浴びせて吹っ飛ばした。

「あれは！」

「ウルトラマンレオ！」

「一体どうなってんだよ、正！？　ウルトラマンはフィクションだろ！？」

「僕たち、夢を見てるのかも……」

レオがマウントポジションでゴモラの顔面にパンチの連打を浴びせる。だが、ゴモラがレオの拳を受け止めて転がり、レオを下敷きにして顔面に連続拳を放つ。

「あのゴモラ、なかなかやるね」

「そうだな」

レオはゴモラの拳を受け止め、その巨体を上空に蹴り上げた。そして、ネックスプリングで立ち上がって飛躍する。

「イヤー！」

ゴモラの真上に移動して両手を組み、地面へと叩き落とすレオ。

「ギャウ！」

ゴモラは地面に激突して呻き声を上げた。

「地獄へ堕ちろ！」

レオは右足を赤く発光させて必殺のレオキックをゴモラの腹に叩き込んだ。

「グエツ！」

ゴモラは大爆発を起こして跡形も無く消え去った。

レオは赤い光球となって二人の前に移動すると、ゲンの姿に戻った。

「二人とも、僕の活躍はどうだったかな？」

「うん、凄く格好良かったよ」

「ああ。ウルトラマンを生で見れて感動しちゃったぜ」

「でも、どうしてウルトラマンが実在するんですか？ ウルトラマンってフィクションの筈ですけど」

「ああ、実はな――」

ゲン自分たちが別世界の住人である事と、ジャッコフロストと言う未知なる者が悪さをしていると云う事を話した。

「そうなんですか。それは大変な旅ですね」

「そこで一つ君たちに訊くが、この星に星人は来ていないか？」

「今の所宇宙から侵略者は来てないですよ」

「そうか。だが、さっきのゴモラの事もある。安心は出来ないな。所で、この辺りに宿は無いか？ 活動拠点にしたいんだが」

「だったら私の家へ来いよ」

「さ、紗夜さんの家は拙いんじゃないかな。罨が沢山あるし」

「じゃあ他にどこがあるんだ？」

「……僕の家、とか？」

第14話：落ちたウルトラマンレオ。フレア登場（前書き）

今回はある意味二回落ちます。

第14話：落ちたウルトラマンレオ。フレア登場

住宅街の一角。今元家はそこにあった。その家の正の部屋に、ゲンたち四人は集まった。

ここへ来てから一時間、誰も口を開いてはいない。

ゲンは先程からウルトラマンの漫画本を読んでいた。それは前の世界でナギの部屋にあったものだ。それに気付いた遥が思わず口を開いた。

「おおとりくん、それ持って来ちゃったの？」

「ああ、面白いから全巻。悪いかな？」

「ダメだよ、人の物持って来ちゃ！」

「人の物は俺の物、俺の物も俺の物だ」

「どこのガキ大将だよ！？」

それにはアスムも突っ込んだ。

「ウルトラマンレオってこんな主人公じゃないよね」

「何だよ、お前ら？」

「まあ、持って来ちゃった物はしょうがないね」

「兄さん、僕にも読ませてよ」

「ああ、うん」

ゲンは漫画本をアスムに渡した。

「さて、ジャッコフロストの行方も掴めないし、これからどうしようか」

シーンとなる部屋。だが、携帯を見ていた麗子がそれを引き裂く。

「ゲン様、大変です！」

「どうした？」

「先程、東京が消滅したそうです」

「何だって！？」

「何でも、ペダン星人と名乗る者が巨大なロボットを送りつけて東京を焼き払ったんだとか」

「キングジョーか」

「おい、お前ウルトラマンだろ。私たちの街が襲われる前に何とかしてくれよ」

紗夜の言葉にゲンは立ち上がった。

「ああ！ 任しといてくれ、紗夜ちゃん。君たちの町……いや、この地球は俺が守る」

「ねえ、兄さん。それは良いとして、ペダン星人が送りつけて来るキングジョーの着地点は分かるの？」

「いや、分からないけど、待ってれば向こうから来るだろ」

「それじゃあ遅いんじゃない？」

「う……」

「おおとりくん、あれを見て」

遙が窓の外を指差す。その先に巨大な黒い飛行物体が数機現れた。飛行物体は機関銃を発射して街を破壊し始める。

「間違いない。あれはキングジョーだ！」

飛行物体は合体してキングジョーブラックとなった。

キングジョーブラックは逃げまどう地上の人々を光弾で吹っ飛ばす。

「アストラ、この家の家族を頼む！ 桃園さんと麗子さんは逃げ遅れた住民の避難誘導だ！ 出動！」

「……はい！」「……」

アストラを除く三人は家の外へ飛び出した。

（ペダン星人め、赦せない！）

キングジョーブラックへ駆けていくゲンは叫んだ。

「レオ——ッ！」

獅子の瞳が輝き、ゲンは飛び上がると同時にレオへ変身。空中でフリップしてキングジョーブラックを両足で蹴り倒す。

横たわったキングジョーブラックからペダン星人の声が訊ねた。

「何者だ、貴様！？」

「俺はウルトラマンレオ！ ペダン星人、貴様がこの世界に来たと

言う事は、ジャツコフロストが陰で糸を引いてるな!？」

「よく分かったな、その通りだ」

「ペダン星人、元の世界にある自分の星へ帰れ！ 破壊活動など赦さん！」

「そうはいくか」

キングジョーブラックは起き上がり、レオに光弾を連射する。

レオは迫り来る無数の光弾を連続バク転でかわす。

キングジョーブラックは分離してレオを囲む。

「しまった！」

キングジョーブラックの各パーツがレオへ光弾を浴びせる。

「ぐわあああ！」

大ダメージを負ったレオのカラータイマーが赤に変わって点滅を始める。

「四対一なんて卑怯だぞ！」

「黙れエ！ 勝てれば良いんだ、勝てればア！」

「ダア！」

レオは飛び上がった。

「逃げる気か!??」

キングジョーブラックの各パーツがレオを追う。

「誰も逃げるとは言ってないがな」

「何!??」

成層圏を飛び出したレオは太陽へ接近した。

「何を考えている!??」

「ペダン星人、ウルトラマンの活動エネルギーは何だ？」

「光……まさか!??」

「そう言う事だ」

レオが日の光を吸収すると、赤く点滅していたカラータイマーが青に戻った。

「太陽で体力を回復だと!? ふざけんなア！」

各パーツが合体してキングジョーブラックとなり、突進してレオ

を捕まえた。

「このまま太陽に落つことしてやる！」

「そんな事したらお前も焼け死ぬぞ」

「安心しろ。これは遠隔操作だ。つまり、焼け死ぬのはお前だけなんだよ！」

キングジョーブラックはレオ諸共太陽に突っ込んだ。

（凄い熱だ！）

キングジョーブラックの装甲は太陽の熱に耐えきれず溶けて蒸発してしまつた。

レオは炎を抜けて地面へ墜落した。

（太陽に陸！？）

レオは起き上がり、辺りを見渡す。

（酸素がある。太陽は炎で被われた惑星だったのか。しかし生命までは……）

そう思つた時、黒色長髪で端正な顔立ちの女性がレオの前に現れた。

（人間！？）

女性はレオを見て言った。

「ゴフヤッセヨケマミツサ？」

（初めて聞く言葉だな。だが分からない訳じゃない）

レオはゲンの姿になつた。

「……！？」

驚く女性。

「俺はウルトラマンレオ。ここへはペダン星人の戦闘ロボットに突き落とされてやってきた」

女性はゲンの言葉を理解出来ずに疑問符を浮かべたが、頭上に電球を浮かべて懷からコンニャクを取り出して彼に差し出した。

「コンニャク？ これを食べるって言うのか？」

女性はゲンの言葉を理解したかは知らないが、取り敢えず頷いた。ゲンはコンニャクを食べた。

「私の言葉が分かるか？」

「ああ、何となく」

「それは翻訳コンニャク。あらゆる言語を翻訳してくれる優れ物だ。それで、ここへどうやって入った？」

「さっきの言葉が通じなかったか？」

「ウルトラマンレオとペダンと言うのは分かったが、他は理解出来なかった。お前は何者だ。どうやって入った？」

「ならもう一度言う。俺はウルトラマンレオ。ゲンとでも呼んでくれ。ここへはペダン星人の戦闘ロボットに突き落とされた。ここは一体何なんだ？ 太陽に陸があり人間が住んでるなんて」

「太陽……異星人はそう呼んでいるのか。ここはフレア星だ。ここへは外から侵略者が入れない様にこの星を高温の光で覆っているのだが、お前は平気なのか？」

「俺の体はどんなに高温な環境でも耐えられる様に出来ている」

「そんな体質の宇宙人が居るとは初耳だ」

「宇宙は広い。捜せばいくらでも居る。で、君の名は？」

「私はこの星の王女フレアだ」

「君も王族なのか。実は俺も獅子座Ｌ７７星の王子なんだ。けど、故郷は凶悪なマグマ星人の司令に破壊されてしまった」

「それは可哀想な話だな。それより、私に付いて来い。城へ案内する」

ゲンはフレアを先頭に三十分程度歩き、城へとやってきた。

「ここで待っていてくれ」

ゲンは城門の前で待たされた。

（立派な城だな。近くには町もある。故郷を思い出すな）
城内からフレアが出て来る。

「今、城の者に話をしてきた。中に入っていぞ」

ゲンはフレアに王室へと通された。

王座には、年老いてはいるが、美しい女性が座っていた。その顔は、Ｌ７７星が爆発する際にその星の住民たちと共に脱出艦で脱出

をした実の母親にそっくりだった。

「母上？」

王座の女性は疑問符を浮かべた。

「客人、私はそなたを知りませんよ。何方かと勘違いをなさってるのではありませんか？」

「すみません。行方知れずの母に似ていたもので……」

「行方不明……。客人、そなたのお名前は何と仰るのですか？」

「L77星の王子、ウルトラマンレオです。直ぐその地球……第三惑星でおとり　ゲンと名乗って暮らしています」

「……！？」

女性が驚く。

「あの……どうかなさいましたか？」

「いえ、別に。アルスはお元気？」

「……！？」

今度はゲンが驚いた。

「父を知っているのですか！？」

「知ってるも何も、アルスは私の義理の弟です」

「そんなバカな！？　L77星はことは別の世界にしか無い星です！　一体どうやってお知り合いに！？」

「そうね。先ずはそこからお話致しましょう。実は——」

女性は語り出した。フレア星は元々はゲンが居た世界に存在していた惑星である事、アルスがこの星へ友好を結ぶ為に来訪した際に女性の双子の妹と互いに恋に落ちて連れ帰った事、そして数日前に灰色のオーロラがフレア星ごと飲み込んで別世界へ誘った事を。

「——と言う訳です」

「で……では、私は貴方の甥。そして隣のフレア王女は私のいとこである？」

「そうです。それより、妹が行方知れずってどういう事です？」

「ゲンはマグマ星人の司令がL77星を破壊した時の事を話した。そんな事があったのですか」

その時、大きな衝撃音が聞こえてきた。そして、その直後に兵士がやってくる。

「女王陛下、大変です！」

ひざまずく兵士。

「どうかなさいましたか？」

「たった今入った情報です！ 城下町に牛の化け物が現れて暴れ回っているとの事です！」

「何ですって！？ 直ぐに兵士を召集して向かいなさい！」

「了解しました！」

兵士は慌てて出て行く。

ゲンがマックシーバーを見ると、怪獣反応があった。

「怪獣だ！」

ゲンは城下町へ向かおうとする。

「ゲン、どこへ行くこうと言うのです？」

「城下町です！ 私も協力します！」

「その必要はありません。このフレア星には光の巨人が居ります。

化け物の件はその巨人に任せておけば構いません」

「光の巨人？」

「ゲン、ちよつと来て」

フレアがゲンを別室へ連れて行って二人きりになる。

「私はアルスの娘なんだ」

「え？」

「四万年前、父さんがこの星へ来た時、母さんと出逢って私が生まれた。そして二人はまだ赤ん坊だった私を城の前に置き去りにしていったんだ。その事と一緒に籠に入っていた手紙にＬ７７星の文字で書かれていたよ。ゲン、私はお前のいとこじゃない。姉だ」

「俺の……姉……？」

「これがその証拠だ」

フレアはゲンに左手を見せた。その薬指にはゲンがはめている物と同じ獅子を象った指輪があった。

「それは！」

「獅子の瞳。二万年前に父さんが再びこの星に訪れた際にプレゼントしてくれた物だ。以来、私は恐ろしい力を手に入れてしまった。最初はどうしてもこの力を手に入れたのかが分からなかった。だが、ある事件を切っ掛けに気付いたんだ」

「ある事件？」

「私がこの不思議な力を手に入れてから、この星に巨大生物が現れるようになった。以来、私はこの力でこの星の人間たちを守り続けているんだ」

フレアは窓へ近付いて外を見据える。

城下町で牡牛座怪獣のドギューが暴れている。

「あいつはドギューじゃないか」

「ドギュー？」

「牡牛座に住む宇宙の嫌われ者です。以前、地球で倒した奴の別個体でしょうか」

フレアは窓から飛び降りた。

「姉さん！」

ゲンは飛び降りてフレアを追う。

（姉さんが変身したらドギューは目潰しをしてくる筈……）

「姉さん、あいつは俺に殺らせて下さい！」

「……！？」

城下町に向かって走りながら振り返るフレア。

「ゲン、どうして付いて来た！？」

「姉さんではあいつを攻略する事は出来ません！」

「そんなのやってみなきゃ分からないだろ？ 見てろ」

フレアは両腕をX字にクロスすると、その腕を外側に大きく回して左拳を前に突き出した。

「フレア——ッ！」

フレアリングの獅子の瞳が輝き、フレアは腹部にL77星の文字でフレアを意味するシークレットサインが描かれた端正な顔立ちの

真っ赤な巨人に変身して飛び立った。

「レオ——ッ！」

ゲンもレオに変身してフレアの横を飛ぶ。

「あいつは私が倒す。お前は手を出すな」

レオとフレアはドギューの前に降り立った。

「……！？」

街を破壊していたドギューが二人に気付く。

「おや？ MACの隊員がどうしてこんな所に居る？」

「お前はあの時の！ どうして生きてるんだ！？」

「知り合いか、レオ？」

「こいつは俺が地球の北海道と言う島で倒した奴です。二度と悪さが出来ない様に殺した筈なのに……」

「生き返らせてもらったんだ！」

「ジャツコフロストにか？」

「ああ、そうだ！ そしてこんな事も出来る様になった！」

ドギューが二体に分身した。

「今度は返り討ちにしてやるぞ！」

二体のドギューが二人へ突進した。

レオとフレアはそれぞれドギューの攻撃をかわす。

「くそっ！」

「火加減はウエルダン？ ミディアム？ それともレア？ レアで行くか」

レオは両手を二回叩いてドギューに迫った。だが、攻撃は空を切る。と言うよりすり抜けたと表現するのが正解か。

「何！？」

「残念だったな！」

ドギューがレオの顎にアッパーカットを放った。

「うわあ！」

宙に舞い上がるレオ。

「言った筈だ！ 返り討ちにしてやるってなア！」

ドギューは飛び上がり、レオを叩き落とした。

「うわああああ！」

地面に叩きつけられ、カラータイマーが点滅するレオ。

（前より強くなってる……）

「ぐわっ！」

ドギューに吹っ飛ばされたフレアがレオの上に落っこちてきた。

フレアのカラータイマーが点滅を始める。

「強すぎないか、こいつ？」

「前はこんなに強くは無かった筈なんだが……」

「ふはははは！ 俺はヤプールに肉体を改造してもらったのだ！」

「食らえ！」

フレアが隙を突いて光波熱線を放った。しかし、ドギューの体をすり抜けてしまう。

「当たらないだと！？」

「バカな！？ 相手の攻撃は当たるのに！」

レオは黒潮島の生き残りである盲目の青年の事を思い出した。

「そう言う事か！ 姉さん、退いて下さい！」

「すり抜ける理由が分かったのか！？」

「俺は以前に地球で同じ分身技を使うフリップ星人と戦った事があります。心眼を体得した俺なら……！」

「ならばお前に任せよう。必ず倒せ」

フレアはレオの上から退いた。

レオは立ち上がって言う。

「お前に攻撃が当たらない理由が分かった」

「ならば当ててみる」

レオは両目の明かりを消す。視界が真っ暗になった。

「バカめ！ 目を瞑ったら何も見えんぞ！」

ドギューは数を増やしレオの周りを囲んで迫る。

（どれだ、どれが本物だ？）

ドギュー軍団が既の所まで近付いた瞬間、レオはバックチョップ

で背後のドギューの両腕を切断した。

「ぎゃああああ！」

ドギューの分身が全て消滅する。

「腕が！ 俺の腕が！」

「よくやった、レオ！ とどめは私が刺す！」

そう言っただけでフレアは飛び上がり、千メートルの高さからフリップして右足に纏った赤い炎をドギューに叩き込んだ。

「ぐわあっ！」

必殺のフレアキックをまともに食らったドギューは、地面に転がり大爆発を起こして跡形もなく消え去った。

「レオ、この星に怪物が現れる様になったのは、ジャッコフロストとか言う奴の仕業なのか？」

「それは分かりません。ですが、何かが裏で動いてる事は確かでしょう」

「……。取り敢えず、城へ戻るぞ」

フレアが城の方へ向いた時、上空からミラが降りてきた。

「ミラ・スカーレット！」

「また逢ったわね、ウルトラマンレオ」

「何者だ！？」

「L77星を爆破したマグマ星人の仲間です」

「そうか。ならば消し炭にしてやる！」

フレアはミラに突進した。だが、その先にレオが立ちはだかった。

「この人には手を出さないで下さい！」

立ち止まるフレア。

「何故だ？」

「この人は……。この人は俺の妻です」

「え！？」

戸惑うミラ。

「レオ、お前は侵略者の手に落ちたのか？ だとするなら私はお前を殺すぞ」

「いえ、ミラは特別なんです」

「……そうか」

フレアは城へ飛び立った。

「レオ、どうしてあんな嘘を？」

振り向くレオ。

「訊かなくても分かるだろ？」

「まさかお前、私の事？」

レオは頬を赤らめた。

「アホか。お前が死んだら俺を殺せないだろ？」

「何だ、そう言う事が……」

ミラは詰まらなさそうな顔をした。

「ミラ……」

「ああ、そうだ。お前に伝えなきゃいけない事があったんだわ」

「……？」

「地球が大変な事になってるわよ」

「何だって!？」

「お前が過去に倒してきた怪獣たちをジャッコフロストが復活させたの」

レオは飛び立とうとした。

「待って。貴方一人ではどうにかなる様な事じゃないわ」

「……………」

「そうね……。貴方が私に従うと言うなら援軍を出して上げてもいいわよ」

「それはつまり、お前たちマグマ星人の配下になれと言う事か？」

「そう言う事。もし嫌だと言うなら、このマグマ勲章でこの太陽を爆破するわよ。そうしたら地球はどうなるか、頭の良い貴方なら分かるわよね？」

「この俺を脅迫するとはな」

「貴方が私たちマグマ星人の言う成りになるなら貴方の愛する地球に手出しはしないと約束してあげる。けど、断ったら貴方の大切な

恋人の百子さんが眠っている地球を手下に爆破してもらっわよ。どうする？」

「おのれ、どこまで卑怯なんだ!？」

「貴方のお姉さんが居るこの太陽を破壊されるのも、百子さんが眠る地球を吹っ飛ばされるのも嫌でしょ？」

「くっ……!」

「だったら、私たちの手下になる事ね。そしたら、復活した怪獣たちを倒すのに協力してあげる」

「……分かった。その代わり約束してくれ! 俺の仲間には、愛する地球には手を出さないと!」

「いいわよ。けど、私たちの侵略活動を邪魔したら地球を粉々にした序でに手下総勢で貴方を殺すわ」

「……約束しよう」

「決まりね。艦隊を出撃させるから先に地球へ行っていないさい」

ミラはそう言うのと、現れた灰色のオーロラに包まれて消え去った。レオは拳をグツと握り締めた。

暗黒宇宙のババルウ星にオーロラを伝ってやってきたミラ。

「お帰りなさいませ、総統!」

出迎えるのはマグマ星人の司令だ。

「あのウルトラマンレオを手に入れたわ」

「本当ですか!？」

「ええ。これで侵略活動が楽になるわ。何て言ったって、あの宇宙一の戦闘力を誇るウルトラマンレオだからね」

ミラはニヤリと笑った。

第14話：落ちたウルトラマンレオ。フレア登場（後書き）

ウルトラマンレオを百子の顔と脅迫で見事手中に収めたマグマ星人
現總統のミラ・スカーレット。彼女は一体何を企んでいる？

第15話：黒いウルトラマンレオ

地球の日本に五十体ほどの怪獣が出現した。それらは全てレオが倒した怪獣である。

アストラが単身街への進行を食い止めてはいるが、多勢に無勢。状況は劣勢だ。

（くそっ、何でいきなり怪獣がこんなに！？）
無数の怪獣がアストラを囲む。

（何とか兄さんが来るまで持ちこたえなきゃ！）
アストラは空に舞い上がり光波熱線を放った。
一体の怪獣が消滅する。

（これじゃあきりがない！）

「アストラ——ッ！」

天空よりレオが百体のマグマ星人を引き連れて現れた。

「何でだよ！？」

「詳しい説明は後だ！ 怪獣を殲滅するぞ！」

「うん！」

レオ率いるマグマ星人軍団が地上に降り立つ。

「お前たち、かれ——っ！」

ミラ・スカーレットの言葉に手下のマグマ星人たちが怪獣たちに襲いかかる。

「レオ兄さん、どうして奴らが僕たちに協力を？」

「うん、ちよつとな」

「ちよつとって何！？ ちゃんと説明してよ！」

「マグマ星人現総統ミラ・スカーレットの配下に就いた」

「何だって！？」

「さっき俺は太陽の内側にフレア星を見た。そこにフレアと言う俺たちの実の姉が居た」

「え？」

「母上は昔、太陽の内側にあるフレア星に住んでたんだ。そこで父上との間に出来た子どもがフレア姉さんだ。父上は姉さんを置いてL77星に母上を連れて帰ったそうだ。その姉さんの住む星をミラにマグマ勲章で破壊するって脅されてな。それだけじゃない。恋人の眠る地球さえも滅ぼすと言われた。だから俺はミラに忠誠を誓う事にした。そのお陰でマグマ星人が怪獣の殲滅に力を貸してくれたって訳さ」

アストラはレオの顔面を殴った。

「……!？」

「兄さんのバカ！ 何でそんな脅しに屈服するのさ!？」

「だって、ミラが百子さんに似てるんだもん」

「はあ？」

「俺はミラに惚れちまったんだよ!」

「ふざけんなよ糞兄貴——っ!」

「いや、だけど俺の仲間や愛する地球には手出ししないって約束してくれたしな」

「あいつらがそんな約束を守る訳が無いだろ!？」

「と……兎に角怪獣の殲滅をしような。な？」

「僕は奴らの仲間なんか協力なんかしない!」

アストラは飛び立ち、空の彼方に消えた。

「アストラ!」

しかし、アストラに声は届かない。

「あーら、勘当されちゃった」

振り返るレオ。

「ミラ……」

ミラはレオを睨んだ。

「……様」

「よろしい。さあ、怪獣を倒すわよ」

レオとミラは迫り来るカブトムシ型怪獣サタンビートルにカウンターを浴びせた。

転がるサタンビートル。だが、起き上がって攻撃をしてくる。

レオは突進してきたサタンビートルを捕まえてバックドロップをした。

ミラは上空から横たわったサタンビートルの腹をめがけて急降下してサーベルを突き刺した。

「イヤー！」

続いてレオキックが炸裂。サタンビートルは爆裂霧散した。

「さて、次は……」

「レオ——ッ！」

二人の下にブラックエンドが現れた。

レオは身構える。

ブラックエンドは火炎を吐く。

レオはバックステップで回避してタイマーショットを放つ。しかし、シールドが張られて跳ね返された。

「何！？」

タイマーショットの直撃を受けてひっくり返るレオ。

「ブラックエンドにバリアが！？」

「ジャックフロストの仕業ね、きつと」

ミラはブラックエンドに突進してサーベルを突いた。

サーベルの先端がブラックエンドの脳天に突き刺さり、倒れるブラックエンド。

「ぎゃあっ！」

ミラは背後から銃撃を受けて振り返った。その先にはレオが77星にて蹴りで腹に大穴を開けて殺した筈の元マグマ星総統が居た。

「パパ！？」

元総統はミラに銃撃を浴びせる。

「貴様、自分の娘に何しやがる！？」

レオが元総統に体当たりを浴びせて吹っ飛ばした。

元総統は片手を地面に着き、跳ね上がって着地する。

（こいつ、意識が無いのか？）

レオは元総統に突進してレオキックを浴びせる。

元総統は吹っ飛んで爆発した。

「ギャアオ！」

殺し屋ノースサタンが現れてレオの背中に無数の含み針を突き刺す。

「ぐわっ！」

振り返るレオ。

含み針を飛ばすノースサタン。

レオは飛び上がり、ノースサタンにレオキックを浴びせた。
倒れて爆発するノースサタン。

「ぐっ……！」

レオの背中が痛む。

「抜いて上げる」

ミラがレオの背中に刺さった含み針を引っかく。

レオが辺りを見渡すと、復活した怪獣たちはかなり減っていた。
上空に円盤が現れる。

「貴様ら、よくも俺の手下たちを！」

円盤からミサイルが放たれ、直撃を受けたミラの手下たちが次々に倒れていく。

「ジャッコフロストか！？」

円盤を見上げるレオとミラ。

「乗り込むわよ！」

「はい！」

レオとミラは飛び上がる。

円盤は二人が近付くと瞬く間に消えてしまった。

「また逃げられた！」

下を向くミラ。

地上にはマグマ星人たちの無惨な姿が。

「私の手下が一瞬で全滅するなんて……」
すっかり落ち込むミラ。

「ミラ、落ち込む事は無い。まだ俺が居るからな」

「レオ……」

ミラはレオに抱きついた。

レオはミラを優しく抱き締めた。

「ミラ、俺たちと来い」

ミラは額に青筋を立てた。

「私に命令するな！」

怒ったミラがレオを地面に投げ飛ばす。

「うわああああ！」

地面に激突するレオ。ミラはその傍らに着地した。

「お前自分の立場が分かってるの？ お前は私の手下なのよ。手下が目上の者にタメ口を利くのは良くないんじゃない？」

その時、上空から黒い何かが接近してきた。

「何なの！？」

ミラが上を向いた瞬間、黒い何かが彼女に激突した。

「ぐわっ！」

倒れるミラ。

「ミラ！」

レオがミラの顔を覗き込む。

「大丈夫？」

ミラは震える手で指を差した。その先には黒いウルトラマンレオが居た。

「俺がもう一人！？」

「標的を間違えたか」

「何者だ！？」

「俺はダークレオ。影の世界から来たウルトラマンだ」

「何の用だ！？」

「ウルトラマンレオ、お前の命を奪いに来た」

「レオ、逃げて……！」

「消えろ！」

ダークレオがミラに光波熱線を放つが、しかし、レオがその盾となった。

「ぐわあ！」

吹っ飛ぶレオ。

「ふっ、今日の所はひとまず引き上げだ。だが、この次は無いと思え」

ダークレオはそう言うのと飛び立ち、空の彼方へ消え去った。

「ミラ！」

レオがミラに駆け寄る。

「ミラ、しっかりしろ！」

「最期に言わせて……。私、初めて逢った時から、お前の事が……」

ミラはそこまで言って気を失う。

「ミラ！ 死ぬなミラ！」

だがミラは目を開けない。

「今俺の光をやる！」

レオは両手をミラの体に翳して光を放った。

ミラは光に包まれ、腹部にマグマ勲章が描かれた女性らしい顔付きをした赤い体の巨人に姿を変えた。その胸部のカラータイマーと目は光を失っている。

「ミラ？」

（ミラがウルトラマンに？）

その時、天空より一本の光がミラに射した。そして百子の霊が降りてきた。

「久し振りね、おおとりさん」

「百子さん？」

「おおとりさんがレオだったなんて驚いたわ」

「百子さんなのか？」

「ええ、そうよ」

「君は死んだ筈じゃ？」

「その通りよ。でも、神様が生き返らせてくれるって」

「でも君の体は」

「そこにあるじゃない」

「え？」

「私はそのマグマ星人に生まれ変わるの」

「何だって!？」

「ちよつと、驚きすぎよ」

「……………」

「おとりさん、またよろしくね」

百子の霊はそう言つと、ミラのカラータイマーに吸い込まれた。すると、ミラのタイマーが黒から青に変わり、目にも明かりが灯つた。

「私、生きてるの……?」

ミラは起き上がり、自身の体の異変に気付く。

「何これ？」

「ミラ、君は俺の光を浴びてウルトラマンになったんだ」

「私が、ウルトラマンに?」

「ああ、そうだ。君は今から、ウルトラウーマンミラだ!」

「何か格好いいわ」

「ミラ、その力で俺たちに協力してくれないか」

「誰がお前たちなんかに。私は狡猾ずるがしこくて凶悪なマグマ星人よ。この力は侵略活動に使わせてもらつわ。それじゃあ」

ミラはそう言つと飛び立って空に消え去つた。

第15話：黒いウルトラマンレオ（後書き）

レオに力を分け与えてもらった事でウルトラウーマンになったミラ。しかし、ミラはこの力を侵略活動に利用すると言って聞かない。果たしてレオは彼女を正しく導く事が出来るのか？

第16話：ゲンと星形惑星の少女（前書き）

惑星ポップスターにレオ来る。

第16話：ゲンと星形惑星の少女

世界を渡る列車ウルトラライナーにゲンたち四人は乗っていた。行き先表示板は”星のカービィ”となっている。

「桃園さん、”星のカービィ”について説明してくれないか」

「”星のカービィ”は名前だけで私はよく知らないんだよね」

「そうか……」

その時、ウルトラライナーが激しく揺れ、眩い光に包まれた。

「……うわああああ！」

宇宙のどこかに位置する惑星ポップスターにあるポップランドの一角のポップビレッジの村から少し離れた所に聳える城の一室。

「う……、はっ！？」

うなされていたゲンが突然目を覚ました。

起き上がり辺りを見渡すゲン。傍らには目つきは悪いが意外と可愛いポニーテールの女の子が居た。身長は四十センチぐらい。所謂二頭身と言う奴だ。

「良かった。目が覚めたのね」

「ここは……？」

「私はフーム。貴方は？」

（言葉が通じない！？）

ゲンは回答に困った。

（どうしよう。以前に食べた翻訳コンニャクの効果は切れてるみたいだし）

「もしかして自分の名前が分からないとか？」

（仕方が無い。テレパシーで頭に直接語りかけるか）

『俺の名はおおとり ゲン。ある人物を追って旅をしている。ここはどこなんだ？』

「うわ、何これ？ 頭に声が響いてるけど貴方なの？」

ゲンは頷いた。

「これ何なの？」

『テレパシーと言つてな、超能力の一つだ』

「超能力？」

『それで、ここはどこなんだ？』

「ププランドよ。貴方はどこから来たの？」

ゲンは屋根を指差す。

『宇宙だ。この星で怪獣とかは出現していないか？』

「怪獣？ ひよつとして魔獣の事？」

『魔獣？』

「数万年前に邪悪なる闇の帝王ナイトメアが宇宙を支配する為に作り出したモンスターよ。メタナイト卿を始めとする自由と平和を求める星の戦士たちがそれを滅ぼす為に”銀河戦士団”を結成して戦いを挑んだんだけど、無尽蔵に繰り出される魔獣の前に戦士団は崩壊。僅かに生き残った星の戦士たちは宇宙の片隅に追いやられつつもナイトメアを倒す新たな方法を探していたわ。一方ナイトメアは企業帝国”ホーリーナイトメア社”を設立し、組織的かつ効率的に魔獣を生み出し、宇宙各地の大から小の悪党や金を持てあます金持ちたちに魔獣を売りつけるという方法で自らの勢力を拡大させていったわ。そんなある日ナイトメア要塞から魔獣”カービィ”が追放されたの。彼は魔獣として生まれながらも正義の心を持ち、ナイトメアの命令に従わなかったのよ。カービィはどこからか手に入れた宇宙船の中で眠りにつき、ナイトメアに対抗する力をつけることになったわ。しかしナイトメアの活動が急激に活発化したためにカービィは予定よりも二百年早く目覚め、魔獣が送り込まれていて、また、星の戦士のシェルターであるカブーが存在するこの国へ未熟なままやってくることになってしまったの」

（この世界でも侵略が行われているのか。俺に何か出来る事があればいいのだが……）

『なあ、俺はどうしてここに居るんだ？』

「貴方は森の中に倒れていたのよ。リングを獲りに行った時に偶然見付けてここへ連れてきたって訳」

『他に仲間は居なかったか？ 女の子が二人と男の子が一人』

「見なかったわ。それより、良かったら散歩でもしない？ ププビレッジを案内してあげるわ」

『ああ、頼む』

フームを先頭にゲンは城の外へと向かう。

村へと着くと、キャピイ族と言う埴輪はにわのような住民たちが立ち話をしたり、買い物をしたりしていた。

（埴輪が動いてる……）

村民の一人がフームに気付いて声をかける。

「おや、フーム様。その後ろに連れている八頭身の方は誰ですかな？」

「ポップスター外から来た宇宙を旅している者よ。森で倒れているのを見付けたの」

「それは遠い所からご苦労様です。どうかごゆっくりして行って下さい」

その時、グーと言う音が鳴った。

フームの黄色い顔が赤らむ。

『お腹が空いてるのか。なら何か食べよう』

ゲンは辺りを見渡し、”キサワカ”と右読みで書かれた暖簾のれんが出ている建物を見付ける。

「何で日本語！？」

「え、何て言ったの？」

『いや、何でも無い。あそこ、食べ物やでしょ？』

ゲンはそう言って”キサワカ”を指差す。

「あ……あそこはやめた方がいいわ」

『どうして？』

「不味いから」

『よし、入ろう』

ゲンはフームを引きずって”キサワカ”に入る。

「やめて——っ！」

「いらっしやいませ！」

『お奨めの料理を振る舞って下さい』

「はいよー」

オレンジ色の体をした店員のコックカワサキはテレパシーに何の疑問も持たずに厨房へと入っていく。

ゲンとフームは向かい合って席に座った。

やがて、コックカワサキが出来立ての料理を持ってくる。それにはモザイクがかかっていた。

「何よこの変なの!？」

『これがこの星の料理なのか!？』

「まあ、食べてみてよ。味には自信があるんだ」

二人はコックカワサキに言われてモザイク料理を食べてみた。

「何この味？」

『不味いぞ!』

「オマエタチシタガオカシインジヤネエノ？」

コックカワサキは棒読みで言った。

『こんなもん食えるか!』

ゲンはコックカワサキの顔面に料理を投げ付けると、フームを連れて外へ出た。

「お客さん、お金！」

『誰が払うかボケ！ 行こう!』

ゲンはフームと共にカワサキを後にした。

次にやってきたのは、ププビレッジの外れの丘。そこにはかまくら型の一軒家が建っている。

「ここにさっき話したカービーが住んでるの……いや、凍り付けにされてるって言った方がいいかしら？」

『凍り付け?』

「ええ。昨日、村に魔獣が現れて、それに立ち向かったカービィが凍り付けにされたの」

『取り敢えず、中を見せてもらってもいいかな?』

「いいわよ」

フームが家の扉を開け放った。中に凍り付けにされたピンク色のボール型の生命体、カービィの姿があった。

ゲンはカービィへと近付いてマックシーバーを確認する。

（怪獣反応……星人の仕業か。こんな事が出来るのは冷凍星人ぐらいか）

『フーム、このカービィを凍らせた後、星人……いや、魔獣はどこに行ったんだ?』

「空へ飛んでったわ。それにしても何か寒くない?」

（まさか!）

ゲンは外へと飛び出した。辺り一面に氷が張っている。

「うわ、地面が凍ってる! きつと魔獣の仕業ね!」

『その魔獣を倒せば全て元通りになる』

「無理よ! カービィが戦えない状態でどうやって倒せって言うのよ!」

『俺が倒す。俺はその為に旅をしてるんだ』

「貴方、星の戦士?」

『いや、獅子座L77星の王子ウルトラマンレオだ』

「ウルトラマンレオ?」

ゲンはマックシーバーを見る。村の方角に怪獣反応が出ている。

『ププビレッジが危ない! 戻るぞ!』

ゲンは走り出そうとしたが、足を滑らせてひっくり返った。

「痛!」

「大丈夫? 下が凍ってるんだから気を付けなさいよね」

ゲンは左拳を突き出した。

「レオ!」

獅子の瞳が輝いてゲンは等身大のままレオに変身した。

「姿が変わった!？」

レオは立ち上がる。

『飛ぶぞ』

「え？」

レオはフームをお姫様抱っこして村の方角へ飛び立った。

「と……飛んでる!？」

村の上空へとやってくる。地上はすっかり凍り付けにされていた。

「酷い……」

レオは地上に着地するとフームを降ろした。

「まだ凍ってないのが二人居たか」

「……!？」

驚いて振り返るレオ。そこには冷凍星人グローザが居た。彼は後にメビウスが倒すグローザムの兄である。

「貴様か、この村をこんな風にしたのは！ 今すぐ戻せ！」

「ほお、この星に俺の言葉が理解出来る奴が居たか」

「俺は地球から来たウルトラマンレオだ！」

「異星人だったか。だからと言って生きては帰さん！」

グローザは巨大化した。

「ちよつと待ってくれ！ 場所を変えさせてくれ！」

「どうせ死ぬんだ。どこに居たって同じ事だろう!？」

グローザがレオを踏み潰した。

「ゲン！」

だが、グローザの足が下から押し上げられた。

「……?」

『フーム、ここから出来るだけ離れるんだ！ 死にたくなかったらな!』

だがフームは首を横へ振ってどこへも行かない。

（ならばこいつを出来るだけ遠くへ連れて行く!）

レオは巨大化してグローザのバランスを崩させて倒した。

「ゲンが大きくなった!？」

レオはグローザの両足を抱えて飛び上がった。

「再生されると厄介だからな。このまま太陽に突き落としてやるよ」

「や、やめる！」

「所でお前、どうやってこの世界へ来た。ジャッコフロストにでも呼ばれたか？」

「誰だそいつは？」

（ここは別世界じゃないのか？）

レオとグローザは宇宙空間へ飛び出して太陽に接近する。

「貴様も凍り付け」

「何！？」

グローザが冷気を吐くと、レオの腕が凍り始めた。

（しまった！）

やがてレオは完全に凍ってしまった。

「太陽に落ちるのは貴様の方だ」

グローザはレオを太陽に向かって投げ飛ばした。

太陽の引力に引っ張られ、吸い込まれていくレオ。

レオの氷が太陽熱で溶かされる。

（助かった！）

レオは太陽を脱出すると、ポップスターへ戻ろうとするグローザの背中にレオキックを浴びせた。

「ぐおっ！」

グローザは大爆発を起こして粉々になった。しかし、その一つが集まりだして復活する。

「残念だったな。俺は不死身だ」

「だから太陽に落とそうとしたんだがな」

レオは突進した。

冷気を吐くグローザ。

レオは冷気をかわして真下からグローザにアッパーカットを浴びせる。

「ぐわっ！」

「最期に訊こう。お前の名は何だ？」

「グローザだ」

「さらばだ、グローザ！」

レオはグローザに抱きついた。

「な……何をやる気だ！？」

レオ全身発光。

「俺の熱で貴様を溶かしてやる！」

「うわああああ！」

グローザは段々と溶けていき、やがて完全に蒸発した。

レオは星形の惑星ポプスターへと戻り、ププビレッジのフームの前にゲンの姿で着地した。

「お帰り、ゲン。村が元に戻ったって事はあいつを倒したのね？」
ゲンは頷いた。

「さあ、カービィの所へ行きましょう」

ゲンたちは村外れの丘にあるカービィの家へ向かった。

「カービィ！」

ドアを開けて中へ入るフーム。

「ぽよ？」

「良かったわ、カービィ。氷が溶けて。彼が貴方を助けて……って、居ない！？」

ゲンは居なくなっていた。

フームが外へ出ると、レオが空を飛んでいた。

「さようなら——っ！」

フームは宇宙へ旅立つレオに向かって手を振るった。

（ゲン、また逢えるよね？）

第17話：青狸のSOS！ 僕は狸じゃないやーい！（前書き）

今度は”ドが付く青狸”の世界です。

第17話：青狸のSOS！ 僕は狸じゃないやーい！

レオは宇宙空間を彷徨^{さまよ}っていた。惑星ポップスターで仲間たちを捜したが、一人も見つからないのだ。

（みんなどこに行ったんだ？）

「ぐわっ！」

突然背後から攻撃を受けた。

「何だ！？」

振り返ると、マグマ星人の艦隊が飛んでいた。

艦隊が機関銃を連射してくる。

レオは飛来する無数の弾丸をかわしながら艦隊に接近して殴りつける。

「やってくれるじゃないの」

その声と共に艦隊からウルトラウーマンミラが出て来る。

「ミラか。何の用だ？」

「何の用だとは御挨拶ね。この力さえあればお前なんて必要無いと思つて殺しに来たのよ」

「この力を悪しき事に使うなんて間違つてる！」

「パパの仇——っ！」

ミラがレオに突進して右手のサーベルを突く。

レオは既の所でサーベルを両手で挟み込んで止めた。

「ミラ、君はもうウルトラマンだ。この力は正義の為に使うべきだ」

「何が正義よ。くだらない」

ミラはレオの拳^{こぶ}丸を蹴り上げた。

「ぬおっ！ あっ……！」

一物の激痛に顔が歪む。

「変身してもあるんだ」

「貴様！」

「きやあっ！」

レオはミラを蹴脚で吹っ飛ばした。

「サーベル返して」

手を伸ばすミラ。レオはサーベルを後方に投げた。

「あ、ちよっと！」

ミラがサーベルを取りに行こうとすると、レオにタイマーショットで破壊されてしまった。

「私のサーベル！ よくも！」

ミラは腕をL字に組んだ。しかし、光波熱線は出ない。

「何で光線が出せないのよ!?」

「どうやら俺と同じで光線技が使えないようだな」

「だったら肉弾戦で！」

レオに接近してラッシュを浴びせるミラ。だが、彼にはてんで効いていない。

「その程度では俺を殺す事は出来ないな」

「五月蠅い！」

レオの横顔を蹴ろうとするミラだが、^{たくま}逞しい腕でガードされてしまった。

「それでよく総統になれたな」

「くっ……！」

「所で、旅の仲間を知らないか？」

「しらな……」

（待てよ。こいつの仲間を人質に取ったと嘘を吐いて言う成りさせるのも悪くは無いわね）

「貴方の仲間なら預かってるわ。返して欲しければ私の言うことを聞きなさい」

「何!?」

「私たちは今から惑星フロンティアを落としに行くの。それを手伝いなさい」

「断る！」

「仲間がどうなってもいいの？」

「お前たちの所には居ない事ぐらい分かっている。さっきお前は知らないと答えようとしたな」

「レオ、確かお前は私の手下になったんじゃないか？」

「なつた覚えは無い！」

「きゃあっ！」

吹っ飛ぶミラ。

「女の子の顔を殴るなんて酷い！」

「ついでにこれもだ！」

レオは艦隊にレオキックを放って破壊した。それと同時に乗組員が爆発に巻き込まれてバラバラになった。

「何て事をしてくれたのよ！？」

「ミラ、心を入れ替えるんだ！」

「誰がお前たちウルトラマンになんか！」

ミラはそう言うのと彼方へ消え去った。

（みんなを捜さないと）

その時、レオの前に灰色のオーロラが現れた。

「ま……まさかまた？」

案の定レオはオーロラに吸い込まれた。

「うわああああ！」

レオはゲンの姿になり、眩い光に飲み込まれ、東京の空き地へと墜落した。

「何だ？」

腹這いになったゲンを四人の小学生が見つめる。眼鏡をかけた黄色い服の少年とゴリラのような大男に狐のような顔をした少年。そして可愛い女の子だ。

「うっ……」

ゲンは起き上がった。

「おじさん、どこから来たの？ 名前は？」

「おじさん！？ まあいいか。俺はおとり ゲン。宇宙から来た。」

君たちは小学生か？」

「この人宇宙人なのに日本語喋ってるよ、ジャイアン？」

「今上から落ちてきたみたいだけど、何か遭ったの？」

「宇宙を飛んでたら灰色のオーロラに吸い込まれたんだ」

四人は慌てて遠ざかった。

「おじさん、怪獣じゃないよね？」

「違うよ。僕はウルトラマンレオだ。怪獣はどこから来るんだい？」

「おじさんと同じオーロラからだよ」

その時、灰色のオーロラが現れてトゲのある球体が出て来た。

「リフレクト星人！」

「うん？」

球体がゲンへ振り向く。

「おやおや、ウルトラマンじゃありませんか」

「ここへどうやって来た！？」

「ジャッコフロストさんに送っていただきました」

「ジャッコフロストがらみか」

「そうそう、貴方のお仲間をお預かりしています」

「何だつて！？」

「返して欲しければ俺の所へ来い、そう言っておられました。今日はそれだけ伝えに来たので、これで失礼致します」

球体はそう言うとおーロラに戻って消え去った。

「おじさん、今のは？」

眼鏡をかけた黄色い服の少年が訊ねた。

「リフレクト星人だ。それで、怪獣の話に戻るけど、これまでの被害は？」

「東京タワーが昨日破壊されちゃったんだ。岩を投げる黄色い怪獣に」

「それはひょっとするとどくろ怪獣かも知れない。所で君たちの名前は？」

眼鏡が野比　のび太、狐顔が骨川　スネ夫、大男がみんなからジ

ヤイアンと呼ばれている剛田 武、女の子が源 しずかである。

「ここはドラえもんの世界なのか」

「おじさん、ドラえもんを知ってるの!？」

「あ……会った事はないが、話だけは……」

「お願い! ドラえもんを助けて!」

「え?」

「ドラえもん、昨日現れた怪獣に食べられちゃったんだ!」

「どこでもドアがあるから大丈夫でしょ?」

「それが生憎修理中で」

「通り抜けフープ」

「それも修理中」

「ん……、困ったな……」

「ねえ、おじさん、お願いだよ」

「俺たちからもお願いするぜ! ドラえもんを助けてくれ!」

「……よし、分かった! 僕に任せてくれ!」

四人の顔が明るくなった。

その時、怪獣の鳴き声と共にレッドキングが現れた。

レッドキングは周囲の建物を破壊し始めた。

「おじさん、あの怪獣だよ!」

のび太が指を差す。

「君たちは安全な所に案内するんだ!」

四人がその場から走り去る。

ゲンは腕をクロスして外側に大きく回し、左拳を前に突き出す。

「レオ——ッ!」

等身大のままウルトラマンレオに変身したゲンはレッドキングの下へ飛び立った。

レッドキングが鳴き声を上げた瞬間、口の中に飛び込むレオ。そして、そのまま食道を通って胃袋に行くと、腹部にポケットを付けた青い狸の姿があった。

「助けに来たぞ、ドラえもん!」

「誰？」

「俺はウルトラマンレオ。ここを脱出しよう」

レオはドラえもんを抱こうとした。が、重くて持ち上がらない。

（仕方がない）

レオは巨大化してドラえもんを手の平に乗せると同時にレッドキングを内側から粉碎し、彼を地上に降ろした。

「有り難う。ポケットも使えない状態だったから助かったよ」

レオは空へ飛び立った。すると、灰色のオーロラが現れ、彼を別世界へ誘うのだった。

第18話：レオ、まさかの敗北！？ 最強のアトランタ星人！

荒野に現れた灰色のオーロラから出て来るゲン。

「今度は何の世界だ？」

辺りを見渡すと、横たわっている遥を見つけた。

「桃園さん！」

ゲンは遥に駆け寄って抱き起こす。

「桃園さん、しっかり！」

「うつ……、うつ……」

意識を取り戻した遥が徐に目を開けた。

「おおとりくん……」

「桃園さん、捕まったって聞いたけど」

「それがよく分からないの。」星のカービィ”行きの時に光に包まれた後、どこかの手術室に運ばれたのは分かるんだけど、それ以外は何にも……。ごめんね」

「体に異常が無いかわ調べさせてくれ」

「君、私の裸を見ようって言うの？」

遥の裸体を想像したゲンの頬が赤らむ。

「いいよ、おおとりくんなら」

「す……直ぐに終わるからね」

ゲンは遥の体を隅々まで調べた。しかし。

「特に異常は見当たらない。何もされてないみたいだね。所で、ここが何の世界分かる？」

遥は辺りを見渡して答える。

「ここは”ドラゴンボール”じゃないかな」

「どらこんぼる？」

「だからそれやめろって言ってんだろ！？」

遥はゲンの頭に拳骨をお見舞いした。

「痛！」

頭にタンコブが出来るゲン。

「ドラゴンボールと言うのは悪の組織や宇宙からやってくる侵略者たちから地球の平和を守る為に戦う戦士たちの物語なの」

その時、不思議な髪型をしたオレンジ色の胴着を着た男が現れた。

「この人は孫^{そん} 悟空^{ごくう}だね」

「あれ？ お前^{めえ}、何でオラの名前^{めえ}知ってたんだ？」

「知ってるよ。君は有名なもの」

「そっか。所でお前たち、物^{もの}凄^{すげ}え気を感じっけど、一^{てえ}体^{てえ}なにもんだ？」

「俺たちはある人物を追ってる通りすがりの宇宙人だ。もしかすると、ここも奴に何かされてるかも知れないと思ってな」

「奴って誰だ？」

「ジャツコフロスト」

「そいつならオラ知ってっぞ！ ついこの前、オラたちの前に現れて巨大な生物を呼び出していったんだ！ お前たち、そいつとどんな関係なんだ？」

「いや、まだ会った事は無いんだけど、そいつの為におかしくなった世界を元通りにしてるんだ」

「そっか。……うん！？」

「どうしたんだ？」

「でけえ気が暴れてる。あっちか」

悟空は飛び立った。

「何者なんだ、彼？」

「この地球を守ってるサイヤ人だよ。兎に角、あの人を追おう」

「あ……ああ」

ゲンは遥を抱くと、飛び立って悟空を追った。

「おーい、待ってくれ！」

目の前を飛ぶ悟空が振り返った。

「どこへ行こうってたんだ？」

「何者かが街で暴れてんだ。放つとく訳にはいかねえ」

悟空は速度を上げ、二人から遠ざかっていく。

「ねえ、おおとりくん。変身してないのに何で飛んでるの？」

「うん？ 念力念力」

「ああ、成る程」

「見えたぞ。あれだ」

街の上空へと辿り着いたゲン。一足先にやってきていた悟空が宇宙恐竜のゼットンと戦っていた。

ゲンは地上に着地して遥を降ろした。

戦いの様子を見てみると、悟空が光波熱線を放った。だが、ゼットンはバリアを張って跳ね返した。

「うわあ！」

ゲンたちの下へ吹っ飛んでくる悟空。

「大丈夫か？ あいつに光線技はダメだ。いいか、見てろ」

ゲンはアルスの剣を手に駆け出し、ゼットンの足下で飛び上がる。

「イヤー！」

だが、剣を振るう前にはたき落とされて踏み潰されそうになる。

「レオ——ッ！」

獅子の瞳が輝き、レオに巨大化変身してゼットンを蹴り倒した。

レオはネックスプリングで立ち上がり、起き上がったゼットンを巨大化した剣で切りつけた。

蹠踉めくゼットン。

「終わりだ！」

レオは剣を水平に振るってゼットンを真つ二つにすると、光に包まれてゲンに戻った。

「今の赤え巨人はお前か？」

と、悟空がやってきて訊ねる。

「ああ、そうだ。ウルトラマンレオって言うんだ。地球では、おおとり ゲンと名乗ってる」

「ゲンか。どこの星から来たんだ？」

「獅子座のＬ７７星だ」

「オラそんな星聞いた事ねえや。それよりお前強そうだな。オラと戦ってくれねえか？」

「そんな事は私が許さないよ。二人が戦ったら地球が壊れちゃう」
そう言うのはいつの間にかやってきていた遙だ。

「そんじゃあ仕方ねえな」

「さて、これからどうするかな」

「なあ、行く所がねえんならオラの家へ来たらどうだ？」

「いや、結構だ」

ゲンは悟空から遙へ顔を向ける。

「桃園さん、行こう」

「どこへ？」

「この世界で何が起ってるか調べるんだ」

「分かった」

ゲンと遙は街を後にした。

「——と言つてもどこから調べたらいいか見当も付かないんだよな

……」

「じゃあさ、ドラゴンボールを集めない？ 七つ揃うと神龍（シエンロウ）と言う

緑色の大きな龍が現れてどんな願いでも叶えてくれるんだよ」

「それが本当なら百子さんを」

遙がゲンを睨む。

「な……何！？」

「君はまだ死んだ恋人の事を引きずってるの？」

「桃園さんだって僕の代わりに消えてしまった……」

遙がゲンの頬をひっぱたく。

「桃園さん？」

「おおとりくんのバカ！ 私の気持ちも知らないで！」

「え？」

「おおとりくんなんてもう知らない！」

遙はゲンに背中を向けて走り出す。

「桃園さん、待ってくれ！」

ゲンは小さくなったその背中に手を伸ばして叫ぶが彼女には届かなかった。

「あらま、嫌われちゃったわね」

背後からの聞き覚えのある声にゲンは振り返った。そこには人間の姿をしたミラが立っている。

「百子さん!？」

「ミラよ」

「ああ、そつか。で、今度は何の用だ？」

「ちよつとこの世界のお宝を手に入れにね」

「お宝？」

「知らないの？ この世界にはドラゴンボールと言う凄いお宝があるのよ。これを宇宙征服に使わない手は無いわ」

「ああ、それなら知ってる。そう言う事なら、俺はお前の邪魔をする事にする」

「望む所よ。見事に手に入れたらお前を私に忠実なシモベにするよ
うお願いしてやるわ」

「全力で邪魔してやる」

「それより、彼女を追ったら？ あの子、あんたの事が好きみたいよ」

「そんなまさか。だって桃園さんは俺じゃない方のおおとりが」

「お前何も知らないみたいね。桃園 遥の世界におおとり ゲンは存在しないのよ。あの日、彼女の前に灰色のオーロラが突然現れてお前が出て来た」

「何だって!？」

「彼女は幼い頃に空想の産物であるウルトラマンレオのビデオを見てお前に一目惚れしたのよ。そして七夕の日に短冊に書いてお願いしたの。ウルトラマンレオが自分の世界に来てくれるようになってね」

「何でお前がそんな事を知ってるんだ？」

「私が彼女の世界に飛ばされた時にタイムマシンで過去に戻って原因を調べたからよ」

「えっ……」

「兎に角、あの子の側に居てあげなさい。今のあの子、ミラーウーマンに変身出来ないの。ジャックフロストに力を奪われてね。それにアストラも」

「何だって!？」

「いずれあんたの前に彼が敵として現れるでしょうね。さて、言いたい事は全部言ったから、私はお宝を探しに行くわね」

ミラはそう言うとおつという間に立ち去った。

「桃園さん!」

ゲンは遥を追いかけた。

荒野を俯きながら歩いている遥。その目には涙が浮かんでいた。

「おおとりくんのバカ……」

そう呟いたとき、遥の前にゲンが現れた。

立ち止まり、顔を上げる遥。

「おおとり……くん？」

ゲンは遥に襲いかかった。

遥は既の所でバックステップをして攻撃をかわした。

「いきなり何するの!？」

ゲンは無言のまま左手でジ・エンドの動作をする。

「……そう。おおとりくんは私が嫌いなんだ」

遥は懷から鏡を取り出した。

「ミラー・スパーク!」

鏡面に飛び込もうとする遥だが、入る事が出来ない。

「何で!？」

ゲンはにやりと笑うと巨大化してアトランタ星人の姿になった。

「偽物!？」

星人は足下の遥を掴み取った。

「ミラーウーマンに変身出来ないお前など殺す事は簡単だ」

「だったら早く殺してよ……」

「ああ？」

「どうせ私なんか、おとりくんの眼中に無いんだわ。だったら死んだ方がいい」

その時、何者かが星人の腕を切り落とした。

「ぐわああああ！」

激痛に悲鳴を上げる星人。

腕が遥を解放すると同時に落下を始める。

「きゃああああ！」

遥は猛スピードで地面へ真つ逆様。

「誰か助けてえ！」

その時、赤い大きな手が視界に現れ、遥はその上に乗った。

「……？」

顔を上げると大好きな男の姿があつた。

「レオ……」

「話は全部聞いた。俺の側から離れないでくれ」

「それって……」

遥の頬が赤らむ。

「貴様、よくも俺の腕を！」

星人がレオに足払いをかけた。

ひっくり返り始めたレオは遥を咄嗟に両手で包んだ。

横たわり地面を揺らすレオ。

「おらよ！」

星人がレオを蹴る。

レオは転がった勢いでそのまま距離を取り、体を起こして遥を地上に降ろした。

星人はレオに擬態して立ち上がったレオにつかみかかり、その場でクルクルと回ってどっちが本物か分からなくなってしまった。

二人のレオが遥を見下ろす。

「俺が本物だ！」

「違う！ 本物は俺だ！」

遙は二人のレオを観察した。彼女から見て右のレオが自身の左腕にウルトラマンキングから授かったブレスレットを付けている。対して左のレオは逆にはめていた。

「さあ、答えるんだ！」

「俺が本物だよな！？」

遙の左腕の方を指差した。

「こっちが本物よ！」

「おのれ、なぜ分かった！」

「よく見なさい！ 本物は左腕にブレスレットがあるの！」

「ぬう……しまった！」

右腕のレオが星人の姿に戻ってレオに攻撃した。

「ぐっ！」

怯むレオ。

「おらよ！」

星人が蹴りでレオを吹っ飛ばした。

「痛！」

背中を地面に叩きつけられるレオ。

「貴様に殺された仲間の恨み！」

星人はウルトラセブンに姿を変え、立ち上がったレオに頭部のア

イ・スラッガーを投げた。

レオは宙返りでかわした。しかし――

「バカめ！」

アイ・スラッガーが背後から戻ってきてレオの背中を切りつけた。

「ぐあっ！」

にせウルトラセブンはアイ・スラッガーを頭部に装着した。

「仲間はこんな雑魚に地球で負けたのか。話にならないな」

（こいつ、強い……）

カラータイマーが点滅する中、レオは覚束無い足取りで立ち上がった。

「とどめを刺してやる！」

にせウルトラセブンは腕をL字に組んでワイドショットを放った。
「ぐわああああ！」

ワイドショットをまともにくらったレオは倒れ、目の光が消え、
カラータイマーも点滅をやめて明かりを失った。

「おおとりくん——っ！」

遥の叫び声が木霊する。

にせウルトラセブンは遥を見下ろして言う。

「次はお前の番だ」

第19話：ミラの願い

星人が遙に手を伸ばした。

その時、空の果てからマツハで赤い巨人が飛来した。それは、レオとアストラの姉であるウルトラウーマンフレアだった。

「貴様、よくも弟を可愛がってくれたな。ぶっ殺してやるから覚悟しな」

フレアは星人にラッシュを浴びせて怯ませ、飛び上がってフレアキックを叩き込んだ。

「ぐわあああ！」

胸部に必殺の蹴りを受けた星人は吹っ飛んで爆発した。

フレアはレオに自分のエネルギーを分け与えた。すると、レオの目が光り、カラータイマーが点滅を始めた。

「ね……姉さん……？」

レオとフレアは光に包まれて人間の姿になった。

「おおとりくん！」

遙がゲンに駆け寄る。

「桃園さん……」「心配させないでよ。死んじやったかと思ったんだよ？」

「何言ってるんだ君は。僕は不死身さ」

「それで、こちらの方は？」

「姉のフレアだ。弟が世話になってる」

「お世話だなんてそんな。お姉さんなんですか。綺麗ですね」

「有り難う。お前は何と言った？」

「桃園 遙です」

「レオ、お前のこれか？」

フレアはゲンに小指を立てて見せた。

頬を赤らめるゲン。

「そんなんじゃないですよ」

「じゃあ何だ？」

「む……娘？」

「えっ……？」

戸惑う遙。

（おおとりくん、どうして娘だなんて？）

「相手は誰だ。ひょっとしてミラとか言うマグマ星人との子か」

「いえ、ミラーマンと地球人の子です。けど、両親が居ないので養女にもらおうかと」

「おおとりくん、私は彼女がいい」

「だから言っただでしょ？ 僕には好きな人が居るって」

「三角関係が出来てるな」

「おおとりくん、私の物になってよ」

「そもそも好きな人って誰なんだ」

「地球で亡くなった百子さんって人ですよ」

「違う！」

「違うの？ じゃあ誰？」

「……ミラ」

ゲンがそう答えると、袋を手にしたミラが現れた。

「へえ、そうなんだ」

遙とフレアが振り返る。

「百子さん？」

「いいえ、ミラ・スカーレットよ」

「マグマ星人は人間に姿を変えられるのか」

「いや、これはレオのお陰なの。そいつが死にかけた私に光を分け与えてくれてね。そしたら私はウルトラウーマンに生まれ変わったの。所で、お宝を手に入れたわ」

ミラはゲンに袋を見せつける。その中にはドラゴンボールが七つ入っているのだ。

「まさか、あの願いを本気で叶えるんじゃないだろうね？」

「本気よ」

「やめろ！」

「それじゃあね」

ミラは立ち去る。

「待て！」

ゲンは立ち上がって追いかけた。

「どこ行つた！？」

しかし、ゲンの必死な追跡も空しく、ミラの姿を発見する事は出来なかった。

「くそ！」

その時、空が急に暗くなった。

「何だ！？」

辺りを見渡すと、龍の姿があった。

「拙い！」

ゲンが龍の前に駆けつけると、ミラがにやりと笑って言った。

「ウルトラマンレオを私に忠実なシモベにしてちょうだい！」

「承知した」

龍の目が妖しく輝いた。

「願いは叶えてやった。さらばだ」

龍は球に戻って上空に浮き上がり七方向に飛び散った。

「と言うわけでレオ、お前はこれから私のシモベよ。そこにひざまずきなさい」

ゲンはその場にひざまずいた。

「ミラ様、何なりとご命令を」

「そうね……。それじゃあ、私が命令を下すまで待機してて」

「分かりました」

「じゃあ次の世界で会いましょう」

ミラは灰色のオーロラの中へ消え去った。

ゲンは消えなかったオーロラへ飛び込んでミラを追った。

第20話：CLANNADの世界

灰色のオーロラを抜けると、そこはマグマ星だった。

（あれ、僕は何でこんな所に居るんだ？）

疑問に思うゲンの下にミラはやってきた。

「ついてきたの？」

「ミラ……」

「あら、正気に戻ってるの？」

「何の話だ？」

「別に。じゃあ、私は帰るからみんなの所に戻りなさい」

ミラが言つと同時に灰色のオーロラがゲンを飲み込んだ。

ゲンはドラゴンボールの世界へと戻ってきた。

「おおとりくん」

と、桃園 遥。

「ああ、桃園さん」

「どこへ行つてたの？」

「マグマ星。所で他の二人は？」

「列車で待つてるわ。次の世界に行きましょう？」

「この世界は放置でいいのか？」

「この世界には悟空が居るからね」

「そうか。じゃあ行こう」

その時、列車が現れた。

「気が利く列車だね」

ゲンと遥は列車に乗り込んだ。

列車は発車し、次の世界へ向かった。

町を破壊する怪獣。

逃げる人々。

その中に一人佇む岡崎^{おかざき} 朋也^{ともや}。

（何が起きてるんだ？ あんなでかい生物が現れるなんて……）

怪獣は朋也に気付き、火の玉を放った。

「何！？」

もうダメだ、そう思いながらガードした刹那、ウルトラマンレオが現れて朋也を庇った。

「……赤い巨人……？」

レオは光球を放って怪獣を爆破。ゲンの姿になった。

「危機一髪だったな」

ゲンは朋也^{ナニモン}の方を向いた。

「あんた何者だ？」

「僕はおおとり ゲン。さっきの赤い巨人はウルトラマンレオだ。君は？」

「岡崎 朋也」

「差し詰め、この世界の主役ってところか」

「はあ？」

「いや、何でもない。所で、怪獣が現れるようになったのはいつから？」

「何であんたに答えなきゃいけないんだ？」

ゲンは思った。

（何かやりにくい）

「僕はこの世界を救う為に異世界から来たんだ。怪獣がいつから現れるようになったか教えてくれないか？」

「異世界？ 信じられねえな」

「それもそうか」

「つつか、ウルトラマンが実在したなんて驚きだ」

「他にも居るよ」

ゲンがそう言うと、遙たちが現れた。

「ミラーマンの世界の桃園 遙さんと弟のアストラと桐島 麗子さん」

遥、アスム、麗子の三人は会釈をした。

「岡崎くん、怪獣の事を詳しく教えるんだ」

「しょうがねえな、ったく……。怪獣が現れるようになったのは一ヶ月前からだよ」

「一ヶ月前……」

「……………」

「有り難う」

ゲンは三人を連れて去っていった。

第21話：坂上 智代

とある坂の上にある光坂高校の朋也のクラスに、ゲンが編入した。
「おおとりです！ よろしくお願いします！」

黒板の前に立ってお辞儀するゲン。

「それじゃあ、おおとりは岡崎の隣に」

ゲンは朋也の隣に座った。

「まさかアンタが入ってくるとはな」

「岡崎、こいつと知り合いなの？」

そう訊ねるのは、朋也の前に座っている黄色い髪の春原 陽平だ。
すのほう ようへい

「君は？」

「僕は春原 陽平さ」

「そうか。岡崎くんとは昨日会ったばかりなんだ」

「そうなんだ」

「さてと」

席を立つ朋也。

「岡崎くん、授業始まるよ？」

「フケる」

そう言って教室を出て行く朋也。

昼休み。

なにやら校庭が騒がしい。

ゲンが教室から校庭を見ると、そこにバイクに乗った男が数人居た。

男たちはエンジン音を轟かせている。

そこへ現れる鼠色長髪の女子。

ゲンは咄嗟に窓から外へ飛び出し、彼女の下へ向かった。

「君、危ないから引ッ込んでくれ！」

だが女子はバイクの男たちを数発の蹴りで倒して追っ払ってしまった。

女子はゲンに気付くと振り向いた。

「見慣れぬ顔だな」

「今日編入した。おとり ゲンだ」

「坂上 さかがみ 智代 ともよ だ」

「坂上さんて強いんだね」

「それほどでもないぞ。ところで、何年生だ？」

「三年生だ」

「岡崎のクラスか？」

「うん」

「そうか。じゃああいつに伝えてくれないか。もう遅刻してくるな、と」

「岡崎くんは遅刻魔なの？」

「ああ」

「そうか……。ところで、君は何年生なんだい？」

「二年だ」

「後輩が先輩にタメ口きいていいの？」

「どうでもいいだろ、そんなこと」

（返す言葉がない……）

「もついいか？ 私は行くぞ」

「あ、ああ……」

智代は去っていった。

「さてと」

ゲンは教室へ戻った。

第22話：藤林 杏

放課後。

ゲンは教室に居た。

「おおとり」

朋也が声をかける。

「何だい？」

「E組に行くぞ」

「何で？」

「杏にお前を紹介するんだよ」
きょう

「そうか」

ゲンと朋也はE組に移動した。

「あ、朋也じゃない。どうしたのよ？」

「編入生を紹介しようと思ってな」

「編入生？」

朋也がゲンを前に押し出す。

「誰よ？ この格好いい人」

「おおとり ゲンだ。よろしく」

「藤林 杏よ。よろしくね」
ふじはら けい

ゲンと杏は握手をした。

その時、一人の男子生徒が校庭を見ながら感嘆の声をあげた。

「何だよあれ！？」

ゲンは校庭を見た。

そこにはバルタン星人が立っていた。

「バルタン星人！？」

「フォッフォッフォ、姿を現せ、ウルトラマンレオ！」

「おおとり、どうする？」

「行くに決まってるだろ」

ゲンは窓から外へ飛び出した。

「ここ三階だぞ」

と、突っ込む朋也。

「バルタン星人、俺に何の用だ？」

「私と戦え」

「いいだろう」

ゲンはウルトラマンレオに変身した。

「ダアッ！」

先制攻撃を仕掛けるレオ。

攻撃を受けたバルタン星人は蹠^{よろ}跟めいたが、直ぐに立ち直って両腕のハサミから機銃を発射した。

「ぐっ……！」

怯むレオ。

「お前を倒してこの星をいただく」

「させるか！」

レオは飛び上がり、レオキックを放った。

だが避けられてしまった。

「そんなもの、当たらなければ意味が無いぞ」

「ならばこれでどうだ！」

レオはレッド手裏剣ビームを放った。

バルタン星人にヒットした。

「ぐふっ！」

「とどめ！」

レオはタイマーショットを放つ。

「ぐおおおっ！」

バルタン星人は悲鳴を上げながら爆裂霧散した。

レオはゲンに戻り、E組の教室へ向いた。

杏が驚き戸惑っている。

ゲンは飛び上がり、窓からE組の教室に入った。

「驚いたわ。ウルトラマンが実在したなんて」

「怪獣はどうなんだよ？」

「怪獣も最初現れた時は驚いたわよ」

「実は僕、別の世界から来たんだ」

「別の世界？」

「ウルトラマンが実在する世界さ」

「そうなんだ」

「さて、もういいだろ？ 岡崎くん」

「あ、ああ、そうだな」

「藤林さん、またね」

ゲンと朋也は自分のクラス、D組へ戻った。

第23話：古河 渚／FAIRY TAIL

ゲンは朋也に連れられて、演劇部の部室にやってきた。
部室には古河 渚ふるかわ なぎさという赤毛の少女が居た。

「岡崎さん、その方は？」

「おおとり ゲン、編入生だ」

「おおとりさん、ですか」

「君は？」

「古河 渚です。よろしくお願いします」

「ああ」

その時、校庭に円盤生物ノーバが現れた。

「きゃああああ！」

女生徒の悲鳴。

ノーバは炎を吐いて辺りを火の海に変える。

「おおとり」

「ああ、もちろん」

ゲンはレオに変身、ノーバと対峙する。

「岡崎さん、あの巨人は何ですか？」

「ウルトラマンレオだ」

レオは光線を放ち、ノーバを牽制する。

「ダアッ」

飛び上がり、レオキックを放った。

しかし、ひらりとかわされてしまった。

「これならどうだ」

レオはタイマーショットを放った。

ノーバはタイマーショットを喰らい爆死した。

レオはゲンに戻ると同時に演劇部の部室に入った。

「ジャッコフロストは何を考えてるんだ……」

「ジャッコフロスト？」

「異世界に怪獣たちを解きはなってる奴さ」

「傍迷惑な奴だな」

その時、ウルトラライナーが現れた。

中には遙たちがいる。

「この世界でやることは終わったって訳か」

ゲンはウルトラライナーに乗り込んだ。

「もう行くのか？」

「ああ。じゃあな」

ドアが閉まり、ウルトラライナーは発車する。

アースランド、フィオーレ王国、マグノリアの街中で、レッドキングが暴れていた。

そこへやってくる妖精の尻尾の魔導士たち。
フェアリーテイル

魔法で攻撃するが、てんで効いていない。

「くそ、全然効いてねえじゃねえか！ 何なんだあいつは！？」

と言うのはナツ・ドラグニルだ。

「魔法が効かないモンスターって何なのよ！」

と、ルーシィ・ハートフィリア。

その時、ウルトラライナーが魔導士たちの前に現れた。

「今度は何だ！？」

ウルトラライナーから降りてくるゲン。

「今度の敵はレッドキングか」

ゲンはレオに変身し、レッドキングに戦いを挑んで……。

第24話：ヒツポリト星人

レッドキングと対峙するウルトラマンレオ。

レッドキングに猛攻を浴びせ、怯んだ隙にレオキックでとどめを刺すレオ。

その様子に魔導士たちは驚嘆した。

レオはゲンに戻り、ナツの前に移動した。

「何なんだお前!？」

「ウルトラマンレオだ」

「ウルトラマンレオ？」

「異世界から来たんだ」

「異世界ってエドラスみたいな所か？」

「エドラスが何かは知らないが、そうだ」

「そうか。俺、ナツ・ドラグニル」

よろしくな——と、握手を求めるナツ。

ゲンはナツと握手をした。

「ところで、お前、これからどうすんだ？ 行く所ねえんだろ？」

「ああ」

「じゃあ俺たちのギルドへ来いよ」

「ギルド？」

「ああ。こつちだ、ついてこい」

ゲンはナツに連れられて妖精の尻尾へとやってきた。

「ここがギルド？」

「ここにはな、色んな魔導士たちが居るんだぜ」

「魔導士？」

「とにかく入るぞ」

二人は中に入った。

中には沢山の魔導士たちが居た。

「ナツ、お帰り」

そう言うのはルーシィ・ハートフィリアだ。

「誰、その人」

「おおとり ゲンだ。ゲンと呼んでくれ」

「ルーシィよ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

「お、新人か？」

そこに現れたのは、 그레이・フルバスターだ。

「おおとり ゲンだ。よろしく」

「ああ、よろしくな」

「何だ、一体何の騒ぎだ？」

と、そこにやってきたのは、エルザ・スカーレットだ。

ゲンは思った。

（可愛い……）

「君は誰だ？」

「あ…… 僕、おおとり ゲン。別世界から来たんだ」

「そうか。私はエルザ・スカーレットだ。よろしくな」

「ああ、よろしく」

その時、表から悲鳴が聞こえてきた。

「何だ？」

五人は外へ出た。

その先にはヒップリト星人が居た。

「また化け物か！？」

「奴はヒップリト星人だ」

「星人ってことは、宇宙人？」

ヒップリト星人が建物を壊す。

「その通り！」

ゲンはそれだけ言うと、星人の下へ駆けていった。

「レオ——ッ！」

飛び上がり様にウルトラマンレオに変身。

「現れたな、ウルトラマンレオ」

「俺を知つてるとは光栄だな」

「ああ、お前の事はジャッコフロスト様から聞いている」

「ジャッコフロストは何がしたいんだ？」

「そんな事、私が知るか」

「じゃあ本人に訊く」

「ジャッコフロスト様の所へは行かせんぞ」

星人が指をスナップさせると、筒状のガラスが下りてきて、レオを閉じ込めてしまった。

「ブロンズ像になつてしまえ」

レオを煙が包み込み、煙が晴れると、ブロンズ像になつたレオが現れた。

（動けない……！？）

ブロンズ像にされてしまったレオ。一体誰が星人を倒すのか。

T o b e c o n t i n u e d . . .

第25話：ブロンズ像

ヒッポリトカプセルに閉じ込められ、ヒッポリトタールでブロンズ像にされた身動きの取れないウルトラマンレオ。

「ハッハッハ、これで邪魔者は居なくなった」

星人は地上の人々を見下ろす。

「人間は皆殺しだ！」

星人はノズル状の口から火炎を放射。

「その火美味そう！」

ナツが星人の炎を食べた。

「ぬぁにい！？」

驚き戸惑う星人。

「食ったら力湧いてきた！」

ナツは、「火竜の鉄拳！」で星人の顔面を殴りつけた。

「ぐおっ！？ 貴様……！」

星人はナツを右手に掴んだ。

「こら、放せ！」

「お前から殺してやろう」

「ぐっ……！」

「やめるんだ、ヒッポリト星人！」

と、そこに現れたのは、レオの弟、アストラだった。

星人はナツを投げ飛ばすと、アストラに向いた。

「お前は確かアストラだったな」

「兄さんを元に戻せ！」

「それは出来ない相談だ」

「ならばお前を倒す！」

アストラは星人に駆けた。

星人は腕からミサイルを放ち応戦。

「ぐあっ！」

ミサイルを数発くらって怯むアストラ。

「お前もブロンズ像にしてやる」

ヒッポリトカプセルがアストラを閉じ込めた。

「しまった！」

「もう遅い」

ヒッポリトタールがアストラをブロンズ像に変える。

（アストラまで……！）

「ハッハッハ、これで本当に邪魔者は居なくなった」

星人は腕からミサイルを放って街を破壊する。

「おらおら、もつと燃えろ！」

そこへ現れるウルトラの父ことウルトラマンケン。

ケンはウルトラシャワーでレオのヒッポリトタールを洗い流した。

「助かりました！」

レオは飛び上がり、レオキックを星人に叩き込んで粉碎した。

ケンはアストラにもウルトラシャワーを浴びせた。

「有り難う御座います」

「では私はこれで」

ケンは飛び去った。

妖精の尻尾の前にウルトラライナーは止まっていた。

ドアの前にはゲンとナツが居る。

「もう行くのか？」

「怪獣倒したしな」

「また遊びに来いよな！」

「ああ、元気でな」

ゲンが乗り込むとドアが閉まり、ウルトラライナーは発車した。

第26話：カプトの世界

荒野を走るウルトラライナー。

車内には、ゲン、遙、アスム、麗子が乗っている。

「おおとりくん、次はどんな世界かな？」

「さあ、どんなだろう？」

と、その時、灰色のオーロラが現れ、ウルトラライナーを飲み込む。オーロラを抜けると、そこは廃墟だった。

「一体何が……？」

ウルトラライナーが止まり、ゲンたちは降りる。

そこへ現れる緑の怪物……元いワーム。

「何だこいつ？」

ワームはゲンに姿を変える。

「なっ……！？」

「お前には死んでもらう」

にせゲンはそう言うのと、ゲンに襲いかかった。

ゲンはガードして反撃。

「ぐっ……！」

怯むにせゲン。

「踏みつぶしてやる……」

にせゲンはにせウルトラマンレオに変身、巨大化した。

ゲンもレオに変身、巨大化した。

「何者だお前は？」

「ウルトラマンレオだ」

「ウルトラマンレオは俺だ！」

レオはにせウルトラマンレオにラッシュ攻撃を仕掛けた。

「ぐはっ！」

怯む偽者。

「ダーッ！」

レオは空高く飛び上がると、偽者にレオキックを叩き込んで粉砕した。

レオはゲンの姿に戻った。

そこへやってくるゼクトルーパーたち。

「お前たち、ここは立ち入り禁止だ！」

「貴方たちは一体？」

「我々はゼクトだ」

「ゼクト？」

「兎に角出て行ってもらおうか」

ゲンたち四人は廃墟を後にした。

ゲンたち四人はビストロ・ラ・サルという小さな料理店に来ていた。

ゲンたちはそこで、天道てんだう 総司そうじと名乗る男と遭遇し、この世界の事を聞いた。

この世界は仮面ライダーの世界で、ワームという地球外生命体が侵略しに来ているというのだ。

「ウルトラマンは居ないのか？」

「ウルトラマンとは何だ？」

「巨人だ」

「巨人……」

「機会があつたら見せてやる」

その時、加賀美かがみ 新あらたという二枚目の暑苦しい男が入ってきた。

「天道！」

「加賀美か。どうした？」

「ワームだ！」

天道は席を外すと、足早に店を出て行った。

「面白そうだからついて行こう」

ゲンたちも天道の後を追うように出て行った。

加賀美はそんな彼らを見て疑問符を浮かべたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3537/>

ウルトラマンレオ～異世界を救え！～

2011年8月6日16時37分発行